



全  
 養蠶須知



目次

- 一 扉  
澁川町養蠶實行組合長 後藤善十郎
- 一 題字  
農林大臣 後藤文夫閣下
- 一 題字  
群馬縣知事 金澤正雄閣下
- 一 吉田芝溪先生筆 謝枋得養蠶詩
- 一 序文  
群馬縣蠶絲課長 西村實二
- 一 吉田芝溪先生略傳  
八幡宮社司 堀口藤造
- 一 跋文  
小學校長 田部井鹿藏
- 一 緒言  
澁川町養蠶實行組合長 後藤善十郎

吉田芝溪先生遺著

養蠶須知

淡川町養蠶實行組合長

後藤善十郎謹書

海峽

切天堑

滿體玲瓏  
空谷



芝溪先生語

金澤正雄敬錄



蚕

宋謝枋得

養口資身賴以柔百千生子蛾眉長吐絲  
不羨蜘蛛術餘葉頻催織女忙三起三眠  
時化運一伸一屈命天常待看猷繭成繅  
後先為君王作袞裳

## 序

本邦蠶絲業は、今や我國民經濟の支柱にして、帝國唯一の國際的産業たるの域に達せりと雖も、其發達の過程を窺ふに、斯業の起源は古き歴史を有し、太古上古王朝鎌倉及室町時代と幾多の推移はあれど、概ね一進一退の状態に過ぎず、斯くて江戸時代に入り徳川の中世に至り、永き太平と都會の文化は絹布の需要を増し又農業の發達は蠶業の技術的進歩を促し、當時數多の先覺者が輩出し幾多の著述が出版せられ、蠶絲業國たる素地作らるゝに至り、時偶々安政の開港と相俟ち、斯くて永き由來を有する本邦蠶絲業も、始めて秩序的進展の道程を辿るに至りたるの推移に想到せば、今日の興隆も其原動の力は、當時の先覺者に負ふ所甚大なるを思ふ。

我上毛の地は、養蠶昔より多く海内第一と唱へられ、從ふて斯業の先覺者も輩出し、彼の徳川時代に於ける蠶書の内にも、正徳二年馬場重久氏が著す蠶養育手

鑑又寛政六年吉田友直氏が著す養蠶須知、何れも其名風が高く、本縣に於ては當時前記二書に就て専ら研究せられ、之に自己の工夫を交へて飼育したるものは最も進歩せるものなるべし。

吉田友直氏其號を芝溪と稱し、群馬郡澁川町の人、幼にして文事を好み、去れども農耕を棄てず、郷黨教を請ふ者多く著述する所養蠶須知の外幾多あり、農耕の傍ら又時弊の矯正を論じ書を當路に呈する等、郷土の偉人として遺徳を景仰せられつ、あるは地方文化の偉觀にして、其著す養蠶須知が世人に愛誦せらるゝは上毛蠶絲の偉彩と謂ふべし。

澁川町養蠶實行組合は、組合長後藤善十郎氏を始め組合員全員が眞に一致協力し、斯業の改善共同事業の振興組合の基礎確立に邁進し、今や縣下は勿論全國中多數の模範組合として推奨せられ、昭和七年四月大日本蠶絲會の表彰を受け、業績年と共に隆々前途頗る期待せられつ、ある處、今又芝溪先生の遺稿養蠶須知を刊行して普く世に頒布せんことを、誠に此の組合にして此の舉ありと謂ふべく、先賢

を敬慕するの美風將又文化鍊成への貢獻蓋し偉大なるものあるを思ひ、欣喜に堪へず一言所感を序す。

昭和八年八月

群馬縣蠶絲課長

西村實二



### 吉田芝溪先生略傳

芝溪先生氏は吉田諱は友直、字は子正、通稱宇助後襲名して甚兵衛と改む、芝溪は其號なり。上野國群馬郡澁川の人、家世々農商幼にして大志あり、以爲らく男子應に讀書して名を後世に傳ふべしと、同郡北牧村山崎石燕に従つて儒學を學び廣く經史を涉獵す。曾て云ふ「讀書字を識るを先とす」と字彙を讀むこと一千回遂に之れを諳んず。力學の狀想見すべし。年甫めて十七石燕病歿す。尋て山城の人平澤旭山に師事し經を講じ文を研く學業漸く進み殆ど其堂に昇る旭山著す所の漫游文章に芝溪兄弟の名所々に散見す、而して爾來研學著書自ら娛み世を終る迄力めて已まず、蓋し先生の學術に於ける虚談以て世を睥睨するの傳と同じからず、其の享和文化の間に在つては家弟翠屏と謀り澁川の内芝中と唱ふる地を開墾し良田三十餘町を得兄弟相携へて此に住し耦耕す。文化三丙寅の二月門下生木暮賢樹を伴

ひ水戸に遊び杉山仙太郎の家を主として居り自著開荒須知養蠶須知の二書を源武公に上る、武公之れを嘉納し賜ふに常盤絹一匹金若干を以てす。幾もなく去つて家に歸り農耕研學著書益々勉む傍ら時弊の矯正せざる可らざるものあるを見て書を岩鼻代官所に呈する數回孰れも憂世の至情紙面に溢れ所論剴切を極む、先是郷黨教を先生に乞ふもの尠からず、此に至つて名聲頓に揚り遠近贊を執るもの益多く絃誦の響は山禽の聲と和鳴す已にして先生病を病み溘焉家に歿す。實に文化八年辛未六月十九日也、享年六十墓は澁川町字折原即ち芝中の地に在り、明治四年舊門下生及び地方有志胥謀り六十年遠忌を修す、先生子無く家弟の長子大二郎を以て嗣させしも不幸先つて夭折す。先生下世の後其の心血を注ぎし新田も亦荒廢に屬し近年復興せんとする機運に向ふ先生著す所辨學遼東豕十二卷、附錄一卷、開荒須知二卷、養蠶須知二卷、救荒須知一卷、芝溪遺稿三卷等あり未だ剗刷に附するに到らず。蓋し辨學遼東豕十二卷、附錄一卷は先生世に在るの時幕府に獻し幕府之れを嘉納せしと言ふ、大正五年十月東京高等蠶絲學校創立三十年記念展覽

會開催の際養蠶須知稿本を出陳せしに

皇后陛下 行啓遊され台覽の光榮を賜はりしが還啓の後更に皇后宮大夫を経て畏くも再び台覽を賜はるべきに付御手許に差出すべき旨御沙汰あらせらる無上の榮譽と謂ふべし。

予曾て東京高等蠶絲學校に學び後専ら蠶糸の實務に従ふ、常に芝溪先生に私淑し斯書に依つて訓化を受くる處甚大なり。這次澁川町養蠶實行組合に於いて斯書の再刊頒布の舉あり、先生の略傳を稿して之れを寄す 云爾。

昭和八年四月

澁川鎮守郷社八幡宮 社司 堀 口 藤 造 誌

我が郷の偉人吉田芝溪先生逝いて百廿三年、先生の遺徳功業を景仰するの念彌々切なるものあり、先生在世の時養蠶須知二巻を著して蠶法に一新紀元を劃し、斯業の進展興隆に貢献すること甚だ大なり、説く處學理を緯とし體驗を経とし、養蠶法の眞髓を明らかにせられ、記述懇切平明を旨とし間々活教訓を交へらる、平生謙抑なる先生も自ら斯書を薦むるに當り、確信を披瀝して曰く、

(前略) 何れの國に而も、私養法さへ相用候得ば、凶蠶決而無之、皆年々同様に豊蠶に御座候(後略)

ご宜哉、當時民力涵養殖産興業に志ある領主藩主、地方有力者等、争つて先生の指導を請ひ、斯書を以て蠶法の羅針盤とし、産を興すもの多かりしこと哉、斯くて先生の蠶法は各地に喧傳せらるるに至りしなり、彼の幕末安政開國以來、我が上毛が一躍蠶糸國として其の名を海外に馳せ、國內的には斯業先進國の盛名を擅にし、州人之れに因つて鉅利を得、國富を増進し來りたるもの、實に斯の書に負ふ處頗る多きを想はざるを得ず。最近數年來國際經濟の變調、海外市場の異常、生

産消費の無統制、其の他諸種の事情因々果々相錯綜紛糾して、遂に空前の不況を現し、蠶糸業亦一大打撃に逢着するの已むなきに至り、前途暗愴たる難關の横はれるを見る、眞に一大革新を要するの機なり、此の時に當つて先賢偉人の遺澤を追憶し、刻苦研究精勵の跡を尋ね、勇氣を新たにして難關打開の途を講ずるは、現下喫緊の時務たるべきを信ず、本組合員茲に見るあり、胥謀りて芝溪先生の墓に詣し、追吊祭を擧げ、本書の刊行を企つ、希くは先人の遺徳を顯揚すべき一助ともなり、當業者發憤の契機たるを得んか、斯の書はもご寫本にて世に流傳したるもの、曩に明治十九年十月西群馬片岡兩郡蠶絲業組合に於いて二百部印刷し、全組合員に配布せしことあるも、今日に至つては既に稀覯本となり、容易に入手し難く、斯の書の名を聞き、内容を識らんごして未だ得ざりし同好の士の渴望を醫する料に供せらるれば、蓋し一石二鳥の幸たらん。

本書刊行に際し、卷頭の題字を農林大臣後藤文夫閣下並に群馬縣知事金澤正雄閣下に請ふ處ありしに、快諾揮灑せられ大いに光彩を加へ得たり、尙群馬縣蠶絲

課長西村實二殿より序文を寄せられ、又略傳を澁川町郷社八幡宮社司堀口藤造先生に、跋文を澁川小學校長田部井鹿藏先生に依囑したるが、孰れも快諾執筆せらる、附記して深甚の謝意を表す。

本書刊行の企劃は本組合獨力を以て遂行の意圖なりしが、此の舉を耳にせる郷黨有識者の賛意を表するもの續出し、殊に縣下斯業關係團體にして奮つて資を供せらるるあり、依つて刊行部數を増加し、配布個所を擴大するここを得たり、厚意を寄せられたる各位に對し、此の機會に於いて、深厚なる謝意を表す。

因言、養蠶須知の寫本世に行はるゝもの數種の異本あり、芝溪先生在世中修訂増補せられたりご覺しき點あり、轉寫の際誤れりご思はるゝ點ありされご、孰れも趣意違へるにあらず、本書は前掲蠶絲業組合刊行のものを採るここごしたり。

昭和八年四月

澁川町養蠶實行組合長

後藤善十郎

養蠶須知卷上

目録

養蠶大意	カイコノココロエ
養蠶名義	カイコノ字義
五 廣	カイコノ器具
蠶 性	カイコノタネチエラフ
擇 種	タネヲカンミツニヒタス
浸 臘 水	カイコ出ントシタネノ色カワル
變 色	ススハライ
掃 室	蠶ノ初生ヲハキタテト云
下 蟻	蠶ヲヒログル
擘 黒	蠶ノヤスミチキノ色チベンズ
眠起辨色	

以上十一條

養蠶須知卷上

養蠶大意

上毛澁川村民 田友直 著

夫養蠶之始は

神代保食の神より起り 雄略天皇之御時皇后手づから蠶を養ひ給ふ又諸國に桑を植させ給ふも此御代に始るよし西土にては黃帝の元妃始て蠶を養ふ孟子に曰く五畝之宅樹るに桑を以てすれば五十の人帛を衣るべしとあり蓋天子より下農工商に至るまで寒さを防ぎ膚をおふの第一の品皆養蠶より出るなれば實に貴ふべき事なり故に古は天子に公桑と云あり蠶室あり蠶室は川に近づきて作る蠶時至るときは天子自ら三宮之夫人世婦之中を卜して其吉占なる者に命じて蠶室に入り蠶を養ひ蠶事終りて繭を獻するときは皇后手づから繰て玄統を織り天子の后さへ右のごこくなれば諸侯の夫人は玄統に紘紘といへるを加へて織り大夫の命婦は祭服を織り列士の妻は祭服朝服を織るご記に見へたり然る時は尊貴之人といへごも養蠶之道は心を用ゆべき事なり我上毛の國は養蠶昔より多くして海内第一といへり

然れども男子は養法を不知して皆々婦人女子の手業てわざこそ蠶は其年の氣候きうきに應じて發生はつせいし暖冷あたたかやうやうの氣に應じて生長して繭まゆなるものなれば氣候きうきに應じてそれ〴〵の手だてあり婦女あんなは飼養かひやしなひの法を一偏いっぺんに覺へて氣候きうきの變化に應じて養ふ事を大體はしらざるものなり故に氣候きうきこそ其養ひ覺へたる法はふの時ときは豊あたり氣候少もかわる時は凶あつれ蠶あなるなり然れども蠶を養ふの家蠶の養は其年の氣候に應じてさへ養へば必豊かならずある云ふ事をしらす蠶の豊あり凶あつれは其家其身の運うんにありこそ思ひ豊ある時は運よしこそ悦よろこび凶あつるは年は運あしこそ云ふは大なる誤あやまりなり蠶の豊あり凶あつれは運にあらずして養ひよふの未熟みじくと熟じくしたるにあり運よしは一統いっとうにあたり一統にはづるをいふたごへば五穀ごこくを作るが如し凶年なれば一統いっとうに不實みぢ又豊年なれば一統いっとうに實入みぢよし其中にも少しは上農じやうのふじん人じんと下農げのふじん人じんのちがひはあれども實みぢと不實みぢとは一統いっとうなり是を運よしふなり蠶も元來は野に生たる蟲なれば野におきて自然しぜんに任せなば風雨霜露暑寒さむかの氣候きうきにより豊ある氣候きうきと凶あつる氣候きうきとの年あらん是を人の家にて養ひ風雨寒暑かぜあめしむつゆあつを除はずて飼かひ來る事なれば豊あり凶あつれば運にあらずして皆々養よふの上手じやうづと下手へたとに

あるご知べし其證據しやうこには一村皆凶あつるこそいへども其中五家十家必ず豊ある人あり又如何様なる豊蠶あたらかいこの年も凶あつる、家あり隣は豊れども此方には凶れ東の村は豊りても西の里は凶あつる、又年々豊る人あり又年々凶あつる、人あり是決て一統いっとうならぬものなり然れば運のよしあしはなき事にて凶あつるは皆養法の疎略そりやくにて不足なる事あるご知るべし又隣の家にては養法はなはだ麁相あつにても年々豊り此方の家にては随分ずいぶん大切にすこそ雖いへんも凶あつる、こいふあり是は其麁相あつに見る家は人手すくなくして萬事疎略そりやくなりこいへども肝要かんやうの場所に手ぬけなし又随分ずいぶん大切にこりあつかふこいへども凶あつる家は萬事精密くわんみつこいへども肝要かんやうの時に手ぬけありこそ知るべしたごへ年々豊るこいへども疎略そりやくなるは危あやうしこそ知るべしそれ上毛かみつけの中蠶を養ふ家はかならず蠶の利得りとくを其家半年の取收りにあつるこいへり故に蠶年々豊る人は漸々ぜんぜんと富饒ふたかになり蠶年々凶あつる、家は次第しだいに衰微すいびになる然れば民家の富も衰へも皆養蠶にある事なれば農家の人は是を大切にすへきの第一の事なり我が家昔より蠶を養ふ一年ひととせ旭山きよくざん先生せんせい蠶月さんげつ我が家に淹留えんりゅうありて養蠶じやうらんを熟覽じゆくらんし其養法の疎略そりやくなるを嘆たんじ蠶書をこりて養蠶須知三卷

を論撰し給ふ予是に感じそれより養蠶に心志を盡し和漢の蠶書を尋養法を撰び年々是を試用其上諸方諸國之養法の善なるは尋問合せ考へ養法甚明白なり其上古今蠶書になき事も發明したるもあり年々の養蠶其利其益不淺少是を一家に傳へんよりは是を四方に傳へ人々をして養法の益にあづからしめ又今迄養法の無き場所又一向養蠶を手かけざる人も此書を一覽あらば蠶性養法豊り凶れの迷ひ自然と明白になり其上にて其地ノノの風土を以て是を考へ養は、年々養法に熟し豊り凶れ一毫も疑なく五十の人帛を衣孟子の教と同からん先生の撰し三卷は火災に焼失して世に傳わらず此書先生の作るにあらずといへども先生の書によりて予養法明白になりたる事なれば先生の原本を増補したるの心にて舊名をかへず養蠶須知と題するものなり

養蠶名義

- 一連紙 タネガミ 一種連 タネ 一浸臘水 タネヲ寒水ニヒタスナリ
- 一變色 アラムトイフ 一下蟻 ハキタテ 一掃室 ス、ハラヒ

- 一壁黒 ハキタテノ蠶ヲヒロゲルナリ
- 一二眠 タケヤスミトイフ 一初眠 シジヤスミトイフ
- 一四眠 ニワヤスミトイフ 一三眠 フナヤスミトイフ
- 一繭 マユナリ 蠶の絲を出して作りたる物なり 一蛾 ヒルト云繭より出る蝶なり
- 一蛆 ウジ 繭より出るうじなり 一箔 蠶を養ふ竹にて作たるかごなり
- 一蓐 蠶を養ふむしろなり 一擡 蠶沙をさる事なり
- 一分 蠶を一枚の箔をひろげて二枚にするなり○わけるといふ 一蠶沙 蠶の糞なり○こくそといふ
- 一眠は蠶の變化にて一眠ごとに皮を脱くなり是をやすむといふ西土は三眠蠶を養ふ四眠蠶もあれども三眠蠶土地に相應するこ見へたり頭眠停眠大眠といふ
- 起 は眠よりおきて桑を食するなり
- 一簇 はまぶしなり上簇は蠶まぶしに上りて繭を作るなり簇は茅にても作る又稻わらにても作るなり
- 一宮 は竹にて作りたるざるなり
- 一桑甚 桑の實なり熟したるをいふ
- 一桑花 アヲト、メ又桑子といふ
- 一種 蛾の産たる卵なり



一桑田 カワハラトイフ 桑ばかり植たる畠をいふ

右初心のためにあらましをしるす

五 廣

養蠶を心懸る人はまづ其備へをなすべし五廣は其備へをいふなり一に人二に桑三に屋四に箔五に簇是を五廣といふ廣は何れも多くなければならぬといふなり一に人は蠶を養ふは人手寡くしては萬事間あいかねるなりよつて人の大體をしるすまづ蠶種一枚を養わんと思わば初眠前婦人一人にてよし初眠起より二眠起まで朝夕桑をかりあたへる男壹人あれば一女にて間あふなり三眠起より四眠起までは女二人にて養ふべし朝夕桑を刈る男壹人四眠起より上簇に至りては朝夕桑刈男二人より三人女も二人にては間にあひかねるなりよつて蠶をわける時は上簇の時とは女二人も外にたのむべし其外に桑もぐ人一人やこふへしさて繭になりて繭をひろひこる人は老人にてもよし二人もやこふへし是蠶種壹枚の養の積りなり二枚三枚五枚十枚にても是にて大體考へべし但し多蠶を養ふには此積りより人寡くて

も間にあふものなり

二に桑は蠶の食物は桑ばかりなれば桑少くしては人之穀食不足なること同じ少し餘るよふに貯へべし桑の積り上簇の箔一枚に付下蟻よりならし貳束五分の桑と心得べし大體蠶種一枚の上り蠶二十四五箔より五十箔までなり是は養法上手下手にて違ある事なり此書の法を用ゆる時は一枚の上り蠶大體四十四五箔より五十箔に及ぶなり五十箔なれば桑百貳十五束ならずは不足なり四十箔なれば百束三十箔なれば七十五束二十箔なれば五十束なり此積りにて貯へぬれば不足なく又餘りもなし桑不足にて養ふ時は上手もおのれと下手になるなり又桑の價下直なりとて多蠶を養ふべからず一年桑高直なれば大に難義しあるひは家衰の本となるよつて多く養わんと思はば毎春桑を植へし又桑田をこしらゆべし桑政は附録に委し三に屋は蠶を養ふは家廣からざれば多く養ひがたし茅屋板屋にかぎらず始より其心得にて二階廣く作るべし又有來の家小くば別に蠶室を作るべし其室東西三間半或は四間南北六間半高さ壹丈五尺に作るべし惣二階に南北に窓を開き下にも南

北に口をあけ戸障子をたて寒冷の節は窓をふさぎ戸障子をたて内に熟火を貯ふれば一室中煖になる又暑熱の節は窓戸障子をひらき風をいれ冷しくするよふに作るべし左すれば二階に二行に棚をこしらへ蠶箔百枚餘置べし下にも百枚餘置べし其上にも中に釣棚をこしらゆれば又四五十箔も其餘もおくべし其上農家には秋の取  
いれ又は物置等に用て兩便なるべし

四に箔は蠶を養ふ籠の事なり大は二種あり小箔は長さ三尺より三尺五寸廣さ貳尺三四寸にて四角疊なりに作る名をはまかごといふ大箔は廣さ三尺八寸長さ六尺より七尺に至る是又疊なりに作る但し七尺にては長さ六尺五寸よろし是を蠶種壹枚に四十五枚より五十枚箔と同じ寸尺の蓐も五十枚其外に箔四ツ五ツも貯べし五に簇は蕪を作らするの具なり茅にて作る是を秋のかれの野に茅を刈らせ箔五十枚に茅貳駄の積りに貯へ置雨にぬらすべからず蠶發生前の雨日か又は農事の手透なる日に一振りづゝわかち如此に長さ壹尺壹貳寸に折かさねわらにてゆわへゆわへたる數廿計を一ツにし繩にてしつかりこしめ置べし其外に桑かり鎌

貳丁桑を判む庖丁壹丁小管二ツ是は桑をあ大管一ツ是は桑をは棚は桑をたゆるなりに作る杭木棚竹繩の類ひ不足なきよふに貯へ置べし諸道具不足にては萬事手都合あしきものなり其外うるのもみぬか半俵うるの粟ぬか五升より用意し置べし右何も毒氣なく清淨なるよふにすべし

蠶性

農桑輯要に曰蠶は陽物にして火を好み水を惡むとありまた蠶種連帟にあるうちは極寒によろしといへり

擇種

上州信州奥州にて蠶種壹枚といへるは連紙の廣さ七寸五分長さ壹尺二寸なり尺は矩尺なり種に上下のわかちあり數年の功にあらざれば見わけがたし然れども大略を爰にしるす種の色は深碧にして上白く艶有りて粒々よくそろひ種にむらなくかさなりなくたごへかさなりありてもむらなくかさなりてしまりよく膏澤ありていかほごさわりても種落る事なきを上たねとす種に艶なくしまりよからず粒々そろ

わずして中にしひねあり少しさわればばら／＼落るは下品の種なり種は我が家にてよく養ひよき繭を擇ひ産しめたるは極上々の種にて養よく眠み起もよくそろふなりもし我が家の繭蛾不出して蛆ばかり生ずる年あり其年は随分よき種を價を高く求むべし種賣る人色々の事を云て人を迷し奥州ならでは上種はなしといふ又養蠶家も我が家にて産し種一年凶るれば其後は皆買たる種ばかり養ふこれ大なる誤なり奥州より來る種も養法あしければ豊る事なし我が家にて生したる種も養法よければ年々凶るゝ事なしたさへば五穀の如し其地／＼に生したる種にあらざれば其地に應せず故に其家／＼にて種を貯へ外の國に求る事なし蠶種も同じ事なり我が家にて生したる蠶種は我が家の氣候によくあふゆへ凶れすくなし他國の種は氣候あわざるゆへに豊り少しし知るべし種のさよりよふは末にあり種は我家にて年々産しむれば自然さ上中下見分るものなり必々種賣る人の言に迷ておのれが家にて生したる種をあしゝと思ふ事なかれ種の貯よふは八九月までは風の入る座敷の梁下につるし置十月時分箱にいれ寒き所に置べし蠶種を雪を見せしむるとなかれ發

生あしきものなり

浸臘水

臘月八日に種を出し新汲水を清き桶にいれ其中に種をひたし五日にして取出し陰乾にして水氣なくよくかわきたる時箱に入本の如くしまひ置べしもし濕り氣あれば種性あしくなるなり又ひたさざるも苦しからずひたしたるは煤の氣なごぬけ又あしき粒は死して生せず蠶性よく生長するものなり水は一日に一度づゝかへべし蠶種を寒水にひたすは和漢も通法なり

變色

變色は蠶種發生の前に色かわるをいふ是をあをむといふ蠶發生は西土にては穀雨を以て候さし我上毛信野陸奥にては八十八夜を以て候さす暖地は是より前に生し寒地は是より後に生ず高地山陰の至て寒冷の地は八十八夜より九日も後に生ずる場所もあり大體何れの土地にても桑の葉少しほころび綠葉錢の大ひさに開きたる節を時候さす此時種を箱より出し南風の入るあたゝかなる所にかけて置は自然さ色

かわりて蟻生るなりもし變色おそなわりなば蠶種を天氣よき日に茂りたる桑の枝  
 の中にかけて置種面を日にあてべからず種裏を日にあて少しあたゝまりなばごりい  
 れ又ごり出しかけ置あたゝまりなばごりいれ四ツ時より八ツ半時まで十四五度も  
 すべし左すれば早速あをむなり是桑中の風日にて自然あをむ良法なりさて  
 蠶種色かわりなば家の煤拂ひをすべし

掃室

煤はらひは養蠶の場に限らず惣して家内の中残る所なく煤埃塵なきように主人自  
 ら箒を取てはき出べし大箔小箔棚竹其外蠶中入用之諸道具すゝをはらひ又はあら  
 ひ清潔にすべし羽蟲にて黒き羽ある蟲蠶を害する事あり是は埃塵の中より出又は  
 不潔の爐のほごり魚肉を入たる箱より生ずるものなり蠶は諸毒にあたりやすき蟲  
 なれば心をつくして毒氣なきようにご家を拂ふべし諸毒の事は末にあり

下蟻

ハキタテ  
 蠶種變色より冷しければ七八日暖なれば四五日にて黒く蟻の子の如くなる蟲生る

故に蟻ご名付る下蟻といふ蟻は生して四五日の間の名なり養蠶の第一蠶の蕃息す  
 るも蕃息せざるも皆下蟻にあり故にある人のいへるは蠶の蕃息ご不蕃息ごは下蟻  
 にあり豊りご凶れは眠起にあり繭の好不好は四眠起ご上簇にありごいへり是實に  
 妙言なり中にも下蟻は初生にて毛の如く人の初て生れ出たるご同じ尤大切に心を  
 つくさゞれば養ひ得がたし下蟻の時疎略になしたるは種々の病を生じ其後如何程  
 大切になすごも十分に至る事がたしかへすゞも此養法にたがわぬようにすべし  
 少しにても手ぬけあればあしゝご知るべし蟻初生の食は桑花なり是を桑子といふ  
 元來桑葉にて下蟻すべきものなれごも初生は桑子のかたはらゝごしてごりあつ  
 かひよろし其上大に桑の助なるゆへ是を用ゆるなり但し桑子開きたるは用ゆべ  
 からずよくつぼみたるを用ゆるなりもし桑子開きてつぼみたるなき時は桑葉の中  
 心の葉をつみて下蟻すべし蟻生するは初日は少しにて二日目は初の一倍なり三日  
 目は多く生し四日目には又少し寒冷の年は六日目七日目にも生るものなり蟻生  
 るあいだは毎日ノはくべし今日出たる蟻を少しなりごて明日はくべからずた

ごへ桑子をあたへ置ごも蠶大小ありて大に養ひにくし又病蠶多く其上繭になりて大に好<sup>よし</sup>不好<sup>あし</sup>ありて利得大に少し一日切くごはき一ばん二ばん三ばん四ばんこいく箔にも別々にはくべし下<sup>はき</sup>蟻の法<sup>こたね</sup>蠶種色かわりなは小箔にひこしきつき合せたる紙を四五枚も用意しさて種に蟻一ツ二ツ生じなは種連紙より少し大なる紙へ桑子を少しごりよせもみつぶし其紙の上へはらりごまき其上へ連紙をふせ置<sup>ひる</sup>晝時また桑子を少しふり八ツ半時より七ツ時の頃右の種連をこりあぐれは生<sup>せい</sup>蟻皆桑子にこりつきて下の紙へうつるもし種連に残りたる蟻あらば種うらを指<sup>ゆび</sup>にてはじけば落るなりもし半分生しかりたるもあるものなりあらば別の紙に桑子を少しふり種連をつみ置べし半生の蟻なくば桑子をふらずつみ置べし此時はつぎ合せたる紙につみむへし此初生の蟻を僅<sup>わづか</sup>なりごて桑子をあたへ置明日一所にはくごきは蠶に大小ありてそろわず又桑子をあたへざれば皆死うするなり西土にては是を行馬<sup>かうま</sup>蠶ご名づけはきすてく不用るなり然れごも人に益ある蟲なればたごへ一疋にてもすつべからず少しなりごも別に下<sup>はき</sup>蟻すへし蠶種三枚より上にては初生を一ツにはけは一枚の一はん

蟻ほごあるなり必々すつべからず又明日一所にはくべからず是を蟲はきごいふて敷には不入るなり第二日目を一ばん蟻ごいふ但し蟲はきも桑子のあたへよふ第二日目によひに包<sup>つみ</sup>置たる種連を朝飯<sup>あさはんご</sup>後にひろげ見れば蟻少々生るなりよつて桑子を少しごりよせもみつぶし種連の下へうすくばらりごむらなくふり其上へ種連をふせ置又紙を包<sup>つみ</sup>み置べしつみよふはたご紙を四方を一所折て上をおふばかりなり晝前にまたひろげみれば蟻朝より多く出る又桑子をふりあたへもし種連うらへまわりたる蟻あらばうらへも桑子をふりてつみ八ツ前またひろげ桑子をふりさて七ツ時桑子を多くごりよせつみ置たる蠶種を紙をひろげ連紙をそつごごりあぐれば生じたる蟻皆桑子に移りて下にありさて種<sup>しり</sup>の首尾を二人して持種うらへまわりたる蟻を鳥の羽にてそろくはらひ落し竹の箸にて種にこりつき残りたる蟻を種うらよりたけは皆落るなり蟻落おわりて連紙を見れば半分生れかゝりたる蟻あらこちらにあるものなりよつて外の紙へ桑子をふりて種連をふせてつみ置べし左すれば半生の蟻飢<sup>うめ</sup>る事なごして紙上へうち落したる蟻の上へ一統にむらなく蟻

の見へさるよふに桑子をふり羽の先にてそろ／＼紙上へ横壹尺五寸長さ二尺ばかりに四角にむらなくひろげ置但し蟻少くば横壹尺長さ壹尺五寸位も其上へまたむらなく桑子をふりあたへる是を座ならしといふ此時は桑子ありごとてあたへざれば萬事あしく四方へちりたる桑子を羽にてはきよせ形をなをし暮時また桑子をあたへ夜四ツ時また桑子をあたへ翌朝日の出ざるに桑子をあたへ五ツ時一度四ツ過一度晝過一度八ツ半時一度暮前一度夜二度一日に八度あたへべし第三日目に日出一度五ツ過一度四ツ半時一度三度桑子をあたへ晝前より蟻をひろげべし是を撃黒へきくろといふ法は下にあり是則第一ばん下蟻の養法なり

二ばん下蟻は一ばんをはき落したる跡の種連を外の紙につゝみ置其夜一度桑子をふりあたへ種連を紙につゝむ時一度桑子をふり置は半翌朝日の出に一度食後に一度晝前一度晝過一度四度桑子をふりあたへ其度々に種うらへまわりたる蟻へもふりつゝみ置七ツ時初日より一ばい桑子をこりよせ種うらの蟻を桑子ごこもにはらひ落し種をこりあぐれば生じたる蟻桑子にこりつき紙上にうつるいまだ移らずして種連にこりつきたる蟻あらば竹箸にて種うらよりうち落し跡の種連をまた外の紙へ桑子

をふりて連紙を俯せ置さて紙上へ打落したる蟻の上へ見へざるよふに桑子をあたへ羽の先にてひろげべし二ばんは一ばんより一倍の餘蟻生るなれば横二尺餘長さ二尺七八寸にもひろげひろげおわりなばまた其上へ桑子をふり羽にて形を直し一ばんの如く暮時と夜四ツ時と兩度桑子をあたへ翌日も早朝より夜まで八度桑子をあたへ第三日目に朝より三度桑子をあたへてひろげるなり萬事皆一ばんと同じ是二ばん蟻の養法なり是より三ばん四ばん五ばんと毎日かくべし連紙のつゝみよふ桑子のふりよふ度数皆同じ只ひろげるは多く生ずるご少く生ずるごにより廣きご狭きごは見合せにあるべしごかく下蟻は薄く廣く置ねばならぬご心得べし蟻發生は暖氣なれば四ばんにて残らず出おわる又冷しければ七ばんも八ばんまでも出るなり如此する時は生じたる蟻一疋も損失なく皆一日切に生じたる蠶ゆへ長じても眠起よくそろひて種一枚の上簇四十四五箔より五十箔其餘にもなるなり繭ほしあげ五貫目より六貫目餘になるものなり上絹十一匹より十三匹に至り其外に太織一匹より貳匹其外眞綿貳百目より三四百目出来るものなり是大體の積なり下蟻の時

桑子のあたへよふすくなければ蟻生長あし、世人蟻桑子を食すると思へり食すにはあらず桑子の水を吸ひ生立なり故に桑子少きは生れ子の乳すくなきが如し生立かぬるなり然れども婦人は毎年養ひ來る事なれば舊習の養法を易る事ならぬものなれば蠶家の主人よく此理を心得て婦人によく／＼おしへ右の通りに養ふべし又下蟻を一日づゝ間をへだて、はく事なかれ前にいへる如く大にあし、又世の人蟻は連紙にあるうちは不饑といひて蟻生したる日より三日目四日目にてはく故に初に生じたる蟻は皆死うせて其日生じたる蟻ばかり生立ゆへに其後いかほご養法をつくしても元來寡き蟻ゆへ蕃息すやう／＼十四五箔より二十四五箔三十箔になるを上豊りとするなり下手は十箔ぐらひにておわるもあり是利得のすくなきのみにあらず億萬の生蟻を桑をあたへずに殺す事其不仁たごゑんかたなし自己の知らざる罪を作り自然ご天理にそむき其家不繁昌の本にして其身また其報ひにより病身短命の人となる甚恐るべく慎しむべきの第一なり然れども家々人々其事をしらずして桑高直の年蠶を水に流し又は埋めたる人を見ては不仁なりごて憎めごもお

のれ／＼家にて蠶のはき立に桑子をあたへずして餓死さする蠶はまのあたり目にみへざる事なればかゝりみる人もなく言の是に及ぶ人もなし心ある人は悲しまざらん蠶を流し蠶を埋て桑を賣り利を貪る輩は極悪なれば論にたらず慈悲善良の人も養法を不知る人は自己のしらざる罪業をうけ天地鬼神の憎をうけ其家不繁昌のみならず子孫不善之人を生し禍ひの來る事ゆめ／＼疑ふべきにあらず予故に曰く蠶家の主人養法をしらずしては婦女にのみ任せ養ふはたごへ少しき利得ありごも養わざるには大に劣りて大不仁なり必ず後には其家に其報ひありて病人短命の人多くあるひは家ほろび子孫斷絶すべし又養法によく熟したる人は生れ出たる蠶損失なく貴賤の膚をおゝひ寒を防ぐ國土の寶を出し天地鬼神の感應ありて聖賢の意に叶ひ五十衣帛の仁ごて美々しき善徳なりよく心得て養法に熟すべし

擘黒

蠶ヲヒログルナリ

下蟻より第三日目に朝桑子を三度あたへて晝前に蟻をひろげる是を擘黒といふひろげよふは鳥の羽二枚をもち其莖のかたにて蟻の下よりすくひこれば蟻いたます

すぐひこりて碁石をならべたる如くちよぼくご置初の一倍に廣くひろげ其上へ  
 桑の葉をつみ細く糸の如く判み又横により刻てこまかにしてむらなくふりあたへ  
 べし桑の葉のつみよふは枝本の葉を三葉のこし中心の葉をつむべし桑子より桑の  
 葉にうつる初なれば至てやわらかなる葉にあらざれば食しにくし枝本の葉をあた  
 ゆれば蟻生立おそくしてやせけるなり中心のやわらかなる葉をあたゆれば蟻肥へ  
 て生立よく眠起もよくすむなり初眠前はすべて中心の葉をあたゆべし二ばん蟻  
 三ばん蟻四ばん蟻ごもに皆々下蟻の日より三日目にひろげべしひろげてよりは皆  
 桑の葉にて養ふべし初眠前は桑の葉やわらかにして枯れやすし少し枯れても蠶く  
 わずよつて度くつみてあたへべし大體日の出より夜まで八度づゝあたへべし八  
 度より少くは葉枯るゝなり葉をつむも其度くつみてあたへべし一度つみた  
 るを二度用れば葉はや枯れかゝるゆへ新らしく其度くつまねばならぬなりも  
 し種變色おそなわりて桑子みなひらきて用ひがたき時は桑の葉にて下蟻すへしも  
 し桑葉にて下蟻なばひろげる前は一日に十度づゝあたへべし左なければ葉枯れて

蟻飢るなり擘黒の後は一日に一度づゝ毎日ひろげべし左すれば蠶沙に風入りてか  
 わきよく雨天いへごも蠶沙かびる事なしひろげるをうるさがりて蠶沙たまる時  
 は蠶沙にかび出るなり蠶沙かびたる蠶の豊る事なし別て初眠前かびたるは二眠三  
 眠の時皆死するものなり

眠起辨色

夫養蠶の豊り凶れは養法にあり養法の委しからざるは婦人女子にのみ任せ置て其  
 家の主人養蠶の事を不知るより起る是は男は幼年より産業にのみ心を盡すゆへ自  
 然と蠶の眠起を不知して婦人女子は幼年より手なれたる事ゆへおのづから女の業  
 なりと思ひて女のみ養ふ事になりぬ元來婦人はかしこき人なりごも魯鈍の男より  
 才智せまきものにて風雨暖暑冷涼の氣候に應じて機轉のかけひきは大體出來かね  
 るものなり蠶は天地の化により風雨寒暑の氣候に應じあたゝかなれば早く生じ早  
 く眠み早く起る冷涼ければ遅く生じ遅く眠み遅く起る早きこきは桑の喰ひよふ甚  
 すみやかに冷くて遅き時は桑の喰ひよふまた徐なり雨降時は桑の葉しめりて蠶沙



に濕ありて蒸氣鬱してかびこなりかび出るときは其氣にあたりて蠶病を生じ不眠して僵るゝなり風吹く時は桑の葉枯れて度々あたへざれば蠶常に食したらず食不足なれば氣候と香臭とに大きにいたみ易く然れば風雨寒暑の氣候に應じて養ふ事は養蠶の第一の術なれども婦人女子は此機轉に應じてのかけ引は得心せざるものゆへ毎年同じ養法にて養ふゆへに豊りあり凶れありもし蠶を年々豊らしめんと思わば此條下をよく覺へ蠶の眠起をよく知りて養法に心を盡さば必ず上手になりて凶るゝ事なかるべし此條下を蠶の眠起桑喰盛り老蠶の色を委細に辨じ男子の養蠶を不知る人の入門とし又養法を心懸る人も蠶の色によりて桑をあたゆるの多少をしらしむそれ蠶下蟻の時は其色黒し故に擘黒の名あり下蟻より四五日過て其色少し白く青くなる是を初眠前の桑喰盛りとすそれより二三日過て頭大に丸く口小さく糖色になる是を黄光といふ是初眠なり此時は桑を不喰して口より糸を出して手足を桑の葉莖又は紙葺の縁へからみ付けて不動しておる二日すぎて口の皮落て蛇の皮を脱ぐが如く皮を脱ぐ是を衣を脱ぎといふ衣をぬぎおわれれば口廣く色白く少

し藤花色を帶る是起たる蠶なり四度の眠にも皆皮を脱ゆへに黄光の蠶は動かすべからず動かす時はからみたる糸切れて皮をぬぐたよりあしくてぬけかぬるなり衣ぬげざれば死るなりさて起てより一日半二日桑を喰ひぬれば藤色ぬけて色白く鮮にして底青くなる是を二眠前の桑盛りとす又二三日過て口小さく頭大きく丸くすかしてみれば黄光になる是二眠なり又二三日過て口の皮落口廣く色白く少し藤花色を帶る是起蠶なり起てより二日過て藤花色ぬけて上白く鮮にして底青くなる是を三眠前の桑盛りとす桑盛り過て又口小さく頭大きく丸く黄光になる是三眠なり三眠始る日より二三日過て口の皮落口廣く色白く藤花色を帶る是起蠶なり起て二日過ぬれば藤色ぬけて上白く鮮に底青くなる是を四眠前の桑盛りとす此時は桑をましてあたへべし桑盛り過て又口小さく頭大きに丸く黄光になる是四眠なりまた口の皮落口廣く色白く藤花色になる是起蠶なり起てより一日半二日過て藤色ぬけて底青く上白く鮮になる是を四眠起の桑盛りとす此時は桑甚多くなければ食不足なり故に箔の上桑をあたゆる事厚さ九寸一尺なるべし是を尺桑といふ四眠

起をきより暑氣なれば五日涼しければ七日にて頭皺かしらしわ多く黄光に足より咽のどに至り玲瓏すきんすこし離れてみれば半身より尾に至りて藤花色になる是老蠶なり此時は桑をあたへて其上へ簇あはをたて是を上簇あはこいふ繭まゆを作るなり四度の眠起いねおきもに大小の形はちがへごも變化の色は大體同じ是をよく覺へて蠶を見わくる時は眠起桑盛り老蠶の色皆明白なり明白なれば自ら養法にくわしくなる故に是を入門いふこいふなり

蠶養須知卷上終

養蠶須知卷中

目録

初眠	シジャスミ
二眠	タケヤスミ
三眠	フナヤスミ
四眠	ニワヤスミ
冷年眠蠶法	サムキトシヤスミノソダテ
上簇	アゲコ
收種	タネヲトル
以上七條	

養蠶須知卷中

初眠

シジャスミト云

上毛澁川村民

田友直著

下蟻より涼しければ九日目十日目暖なれば八日目七日目六日にて初眠始る大體八日目九日目にて眠むを中とす十日目十一日目は遅く六日目七日目は早きなり又四日目五日目にて眠む是は氣候と蠶と桑と不合ゆへあしきなり遅きには害なし眠は蠶の大變化の時なれば尤大切なる時なり豊り凶れ皆眠みにありと心得へし別て初眠を一大事とす眠の事は蠶の生立よふ氣候の涼暖にて考見計へし眠につく前に蠶沙をこりひろげべし蠶明日眠まんと思わば今日晝過に蠶の上へ清淨なる毒氣なき粟ぬかをうすくばらりこまき其上へ桑を其日三四度翌日二三度合て六度あたへて箔をかたむけ羽にて捲れば糠より上は蠶一つも不殘されるなり但し少しづつとりて箔にひろげ又とるべしこりたる蠶を大箔に蓆をしき随分と稀く蠶のさわらざるよふにひろげべしもしひろげよふあつければふり桑度々あたへれば雨天の節は蠶沙かびるなりひろげおわりなば桑をあたへし箔中に眠につきたる蠶あらば桑を常より細かにきざみ稀く

度々あたへべし是をふり桑といふなり桑の仕よふは眠蠶箔中に三分ありこみば一日に桑一升あたへるものならば三合五勺ひかへて残り六合五勺を一日中にわりて度敷を三度よけいにあたへべし眠蠶五分ありこみば一升の内五合五勺ひかへて残る四合五勺を一日中にあたへべし箔中八分眠たりこみば一升之内八合餘をひかへて残り貳合たらずを一日中に度々にあたへるなり左すれば蠶眠むに隨ひて桑をひかへるゆへ蠶桑に不埋してよく眠むなり桑はひかへてもあたへる度敷は常より一日に三度づ、よけいにあたへるなり世の人蠶の眠につきたる間住め桑こて桑をあたへず蠶不殘起そろひて後桑付こて桑をあたふ前にいへる眠にて豊り凶れありといふは此住め桑こ桑付この間に蠶飢へて病を生じ凶蠶なるゆへなりよつて予が養法に初眠はくれながしこて桑を不住にあたへ二眠よりは中桑桑付の法を立置て蠶の飢へざるよふにするなりさて初眠初りたる日より一日半か二日過て起たる蠶出るなり起蠶出ても不眠もあるものなれば隨分うすく桑を度々ふりあたへ蠶半分起たりこみばそろ／＼桑をまして度敷をへらし一日中に四度あたへ置

蠶起そろひたる時より一日に六度づ、桑をあたへべし蠶起そろひて一日過なば蠶の上へ又粟ぬかをふり其上へ桑を四度あたへて蠶沙をこりうすく初の一倍にひろげべし如此すれば飢たる蠶一ツもなく初眠二眠はふぞろいなれども次第に桑の食しよふよく進み三眠四眠には皆よくそろひて上々蠶なるなり初眠に住桑を一日一日半あるひは二日こ住桑をいたしぬれば初に起たる蠶飢へて二眠三眠に浮蠶こて眠につかさる病蠶出るなり病蠶は初に起て飢へたる蠶なり初眠は至て幼稚なれば少し桑を住められても飢へたる蠶出るなり二眠は初眠より生長すれば半日其餘桑を住むこいへごも不飢なり但し暑氣なれば半日にても飢るなりもし養法よく熟し眠起よく見分り箔中よくそろひ起蠶もなく不眠蠶もなくば起蠶出る迄半日其餘桑を住も苦しからず然れごも左よふにはそろわぬものなればうすくあたへつ、けにすべし然れごも眠たる蠶の上へふり桑を度々あつくあたへぬれば蠶深く埋り桑葉にて壓され蠶沙にて蒸され其蠶又病蠶こなる偶生長したるも蒸されたるは赤き繭を作るなりよつてふり桑は前にいへる如く眠み次第にひかへてうすくあた

ゆれば蠶桑に埋る事なし又埋りても少しなれば不傷るなり

二眠 にびん タケヤスミト云

大體初眠初りたる日より七日目八日目にて二眠始るなり眠の前にまたもみぬかをふり桑を三四度あたへて蠶沙をこりうすくひろげて眠ますべし蠶沙をこるは四度の眠ごもに眠ご眠ごの間皆二度づゝご心得べしさて眠み初りなば又桑の葉を常より細かにきざみ三度よけいに一日に九度づゝあたへべし二眠前は常の桑一日六度を定法ごす雨ふりなごの涼しき日は五度にてもし眠み初りたるより一日半ご二日過ぬれば起蠶出るなり起蠶出なば其起蠶をひろひごり別の箔にいれ桑をあたへひろひたる跡へまたふり桑をあたへまた一時餘過て起蠶をひろひて跡へふり桑をあたへ三度も起蠶をひろひごれば箔中起蠶多く出てひろひがたし此時桑を住め二時過て箔の中の眠まざる蠶をひろひごりて小箔にいれ桑をあたゆべし桑足る時は皆眠むなり桑を住めたるより半日も過て箔中起蠶五分ありご見ば桑をうすくあたへべし是を中桑ごいふ中桑をあたへて半日過て蠶起そろひて箔中起蠶八分あり

ごみばまた桑をあたへべし是を桑付けごいふ桑付てよりは毎日朝より夜まで六度あたへべしもし中桑をあたへて後半日過ても時候涼しく起かねて六七分起ごみば又中桑をあたへべし中桑一度あたへて半日過れば大體八九分起るものなりもし時候至て寒冷にして中くわ二度あたへても起そろわぬ事あり此時は又中くわをあたゆべし又桑を住めてより半日過ざるに五六分起る事あり是は時候至てあたゝかなるゆへなり其時は時ご日ごに不構半分起たりごみば中桑をあたへ八九分起たりごみば桑付べし如此養ふ時は餓たる蠶一ツもなく病蠶の浮蠶出る事なく一ばんの起蠶のひろひたるは蟲はきへいれて同じく不眠蠶のひろひたるは二ばんへいれて同じく二ばんもまた起蠶のひろひたるは一ばんご同じく不眠蠶のひろひたるは三ばんご同じくなるゆへあしき蠶萬に一ツもなく皆々よく生長するなりよつて二眠三眠四眠ごもに桑を住めなば半日を限りに不眠蠶をひろふべし早くひろひて桑をあたへれば皆眠みて浮蠶出る事なしもし半日餘過蠶飢たる時ひろひたるは病蠶多く繭を不作る蠶多し是我利得少きのみにあらず好蠶を無理に餓して病蠶ご

なす其不仁不慈必ず其報ひあらん能々慎み恐るべし故に二眠三眠四眠にも桑を  
こゝめなば早く不眠蠶をひろふべし是慈と利との兩得あり桑付てより一日半過な  
ば蠶沙をこりてひろげべし此時もみ糠を用ゆ用ひざるもよし蠶もはや生長して  
ひろひよければなり

三眠

フナヤスミト云

大體二眠の初りたる日より八日目九日目にて三眠初るよつて眠の初ざる前に蠶  
沙をこりうすくひろげて眠すべし三眠は俗に長眠といふ眠の間長ければ蠶沙も  
たまり雨天なればかびも出るなりよつて随分うすくひろげ雨天にても蠶沙かびざ  
るよふにすべし初眠二眠三眠ともに雨天のぬれ桑を甚きらふなりぬれ桑をあたへ  
れば蠶沙も濕りてかび出るなり又蠶も食不進なりよつて眠にかかりたる時は随分  
氣をつけ雨の間に桑を刈るべしもし雨間なくば刈たる桑枝を家の中に繩をつり倒  
にかけて露を落しかわかしてきざみあたゆべし又桑をもくに甚を不入よふにすべ  
し桑の葉ばかりにては大體かび出ざるものなれど甚あれば甚よりかび生して一面

にかびるなりよつて甚を随分と除くべし暖なれば一日半二日にて眠みそろひ涼し  
ければ三日より四日にて眠みそろふ眠たる蠶みへなば桑を常より細かにきざみう  
すく三度餘計にあたへべし度数はよけいなれども眠にしたがひ桑をひかへる事初  
眠二眠と同じさで起蠶出なばひろひこりて跡はふり桑をあたへ起蠶多く出てひろ  
ひがたき時桑をこゝめ半日置いて不眠蠶をひろふべしひろひたる起蠶と不眠蠶とお  
のゝ別の箔にいれ桑をあたゆる事二眠と同じさで箔中半分起蠶ありこみば中桑  
をあたへ箔中八分起たりこみば桑付けべし桑付てより一日半過なば蠶沙を取てひ  
ろげべし四眠前は一日に桑四度を常法とすひろげる前の夜は桑を厚く朝迄残るよ  
ふにあたへべしひろげたる翌夕其翌夕も桑を厚く朝迄桑の有よふにあたへべし三  
眠起よりは桑盛りには多く食するものなれば晝の間は桑喰ひ盡せばあたへるもの  
なれど夜は厚く朝迄桑の有よふにあたへざれば桑少し桑少くしては蠶不肥して四  
眠につく此時桑澤山なれば蠶よく肥て四眠につく肥たるは眠起も壯健にて瘦たる  
蠶は眠起も弱遅なり三眠起の桑盛り四眠起の桑盛り十分なれば蠶肥太りて極上

の繭を作るなり四眠起の桑盛り桑十分にても三眠起の桑盛り桑不足なれば中の上の繭を作るなり繭よく作らせんと思はゞ三眠起四眠起の桑盛りに厚く桑をあたへべし

四眠

ニワヤスミト云

大體三眠初りたる日より九日目十日目暖なれば七日半八日目にて四眠初る眠初らざる前に蠶沙をこりてひろげうすくして眠ますべし眠み初りなば又桑を少し細かにきざみうすく三度餘計にあたゆべし暖なれば半日一日にて不残眠む涼しければ一日半二日三日にて眠む眠み蠶見へてよりのふりくわは眠たる蠶の埋れざるよふに又眠まざる蠶の飢ぬざるよふにうすく度々あたへ眠次第に桑をはひかへる事二眠三眠と同じさて起蠶出なばひろひこり跡へはらりこうすくふり桑をあたへ二三度もひろへば起蠶多く出てひろひがたし此時桑を住め半日過て箔中に不眠蠶あらばひろひこるべし起蠶をひろふこ不眠蠶をひろふこ其蠶に桑をあたへる事こ皆二眠三眠と同じさて箔中起蠶半分ありこみば中桑をあたへ起蠶八九分ありて眠蠶

あちこちにある時桑付べし桑付てよりは一日に三度づゝ桑をあたへべし桑付けより一日半過て蠶沙をこりひろげてうすくすへしひろげる前の夜桑を厚く朝迄葉の残るよふにあたへべしひろげたる夜は一箔を二箔にわけるゆへ多く不喰ひろげたる翌夕は蠶生立故又厚くあたへべし惣して四眠起の夕桑は朝迄葉の残るよふにあたゑるを肝要とするなり晝は桑喰ひ盡して無ければあたへるものなれこ夜は朝迄は不構るものなれば桑の葉不残れば桑食し不足と思ふべし夕桑不足なれば其中に強き蠶は十分に食して肥は太り弱き蠶はいつも食不足して瘦る故蠶大小ありてそろわず繭になりて大に上下あるなり桑の葉朝迄残るよふにあたゆれば強も弱も一同によく食して喰劣りなく皆肥は太りて一同に老るなり其上繭になりても極上の繭を皆作るなりさて桑付てより二度までは常の如く桑をあたへ三度目よりは新汲水を桑にあてあたゆべし雨天の時は其儘あたへべし蠶四眠起は露桑を好むゆへなり

蠶四眠までは濕桑をきらふゆへに四度の眠みこもに雨天なれば雨の間を見て桑

を刈取又霖雨にて露落ざる時は家中に繩をはり桑枝を掛て露を落してあたゆるなり左すれば蠶沙かわきてかびる事なく蠶生立よし又ぬれたる桑をあたゆれば蠶食不進して蠶沙かびて病蠶多し故に四度の眠ごもに濡桑をきらふなり四眠起よりは露桑にあらざれば繭あしく予早年に陽中有陰の理を以て四眠起に新汲水打て濡桑をあたへしに繭大によろし其翌年早にあらざるゆへに濡桑をあたへず繭艶なく輕し其後年々四眠起は露桑にて養へは繭よろし又是より前を考るに兩ふる年には一統はあし、こいへごも其中に大に勝れたる繭あり又初より雨ふらぬ年は一統によしこいへごも皆中の上繭迄はあれごも極上こいふ繭は少し是雨ふる年は下手は皆凶る、ゆへ一統はあし、養法上手の人は其年も豊るゆへ四眠起の濡桑にて繭勝れたる出来るなり又雨ふらぬ年は下手も相應にあてるゆへに一統によし其年は養法上手の人も四眠起に露桑を好むこいふ事を不知るゆへに上手の繭なりこいへごも艶なく輕し故に中の上にて最上の繭云は少しこみへたり其後天巧開物を讀しに蠶の條下に曰く蠶大眠後好濕葉若非濕葉則繭無

艶少絲ごあり大眠は西土にてのすへの眠みなり然れば西土にても上簇前は濡桑にて養ふなり是暗に符合せし事なり故に爰にしるす

冷年眠蠶法

サムキトシヤスミニカ、リタルトキノ手ダテ

蠶は元來陽物にして暖を好む暖暑の年は眠も早く起るも早く甚養ひよし唯暖暑の年は蠶眠起甚すみやかなれば桑の食しよふも涼年よりは多くあたへざれば蠶常に飢るなり飢れは病蠶多くして凶る、なり況眠の住食を涼しき年の如く一日一日半あるひは二日住るゆへに暖にて早く起たる蠶は飢て皆病蠶となりあるひは合箔不殘僵る、は皆是暖暑の年の眠起の早きを婦人はいつもの日數にて住桑中桑桑付けをするゆへなり此書の養法にて初眠はくれながし二眠より三眠四眠ごもに五分起にて中桑をあたへ八分起九分起にて桑付け日數にかまわず蠶の起色にて桑をあたへて養ふ時は如何程の暖暑早年にても凶る、事なし兎角眠起は暖にて一日に不殘眠み又一日に不殘起るよふなれば甚養ひよし其年は桑さへたゑざるよふにあたるれは凶る、事なしこ知るべし唯雨天にて冷く眠み初りてより三日も四日もふりく



わをあたへぬれど眠みそろわずまた起蠶も出ざる事あり此時はいかほごうすくふり桑をあたへるこいへごも日數かゝり度數しげき事なれば桑の葉たまりて蠶埋り病蠶となり又蠶沙かびる事あり此時また多く凶すものなり此時に鈎桑つゝくといふ手だてあり是は二眠三眠四眠にかぎらず雨天にてやすみおそきときに用ゆべしまづ眠み初りてふり桑を一日半もあたへしに箔中眠蠶やうやく四五分見へる時は眠みそろふまでは三日も其餘もかゝるなり此時きざまざる葉桑を蠶の上へむらなく一重ならべ置ば眠まざる蠶は皆々桑にこりつく所を其葉をひろひこりて外の箔へ入るれば跡は皆眠みたる蠶ばかり残るなり葉でつりこるゆへにつり桑といふつりたる蠶は桑をあたへれば皆眠むなりつりたる跡の眠たる蠶は五分起こみて中桑をあつたへ九分起にて桑付けし又眠むには氣候あたゝかにてよく眠みそろひて桑を住め眠蠶をもひろひこりたれど俄に雨なごふりて起よふしづかにて住めくわより六時過ても五分起せざるときは又葉桑をならべて起蠶の葉にこりつきたる時ひろひこりて別箔へいれて桑をあたへ跡の起ざる蠶は五分起こみて中くわをあたへ九分

起にて桑付けべし如何様の寒冷の年も此法を用る時は蠶萬に一失なしよつて冷き年にて住め桑より六時過て五分起せざるときはかならず鈎こり又中桑をあたへて後六時過て九分起せざる時は鈎これば蠶飢るこいふ事なくよくそろふものなり又住め桑にて後不眠蠶をひろふは朝桑にて住たる蠶は晝過にひろふべし晝桑にて住めたる蠶は夕桑後ひろふべしもし人手まわりかぬるときはよく朝食前にひろふべし夕桑にて住たる蠶はよく朝食後にひろふべしひろふ時別箔に桑を布置ひろひ次第の中におかず其箔へ入るれば桑を食して次第に眠み上々蠶となる但し是は三眠四眠の住め桑の時不眠蠶をひろふ法なり二眠は二時を限りにひろふべし鈎桑は二眠三眠四眠にも同じ皆冷年の養法なり暖暑の年の三眠四眠には朝桑にて住めたるを晝中桑をあたへ其夜又桑付けばならぬよふなる事もあり是は常にならざる暑年又は其家に喪事なごありて火を多くたかねばならぬ事ある時なり其時は日ご時ごに不構蠶の起色にて四分起よりは中桑をあたへ八分起よりは桑付け又桑を喰ふ蠶には晝は桑のたぬざるよふに度々あたへ夜桑は随分厚く朝迄桑の残るよふ

にあたへる時は如何程の暑氣又は變事にて火をたくともさわりなし此時少しも桑たぬたる事あれば即時に蠶傷なり此兩條をよく覺へて冷年は釣桑暑年は四分起中桑八分起桑付け心得常の年は五分起中桑九分起桑付け定法を立日數に不構養ふ時は蠶眠みにかゝりて傷む事なく凶るゝ事なし

上簇

蠶老テ繭ヲ作ルナリ コレヲアゲルト云

上簇は蠶老て繭を作らんごし作るべきたよりを求める此時桑をあたへて其上へ簇を立て繭を作らする是をあげるごいふ四眠起の桑付より天氣よく暖なれば五日目暑氣なれば四日半涼しければ六日半雨天にて冷ければ七日八日にて蠶老るなり上簇は蠶の終りにて甚大に肝要なる事なり四度の眠起桑盛り如何程よく養ふごも上簇の時其宜にあらざれば好繭は得がたし至て老過たるは繭文理あらく色あしく絲に繰がたし又未老蠶を上簇すればたごへ桑盛りよく食したりごても終りの桑食不足ゆへ繭の皮薄くして絲少し繭をよく作らするもあしく作らするも皆上簇の時にありよく心をつけて試み覺ゆべし麓略なれば年々養ふごも委しく知れがたしよ

く精密に心をつくれれば三年にては熟得すべし熟得すれば年々の養蠶其利必ず多からん繭の好さあしきごにては同じ壹石之繭にても代金貳分ご參分ごの高下あり況や繭よく作りたるは石目も多く繭少し劣りて作りたるは石目も大に少し石目ご値段の高下糸の多少ごは我一人の損得のみにあらず大に國土の損得なりご心得隨分心志を用ゆべし蠶の利得の多少皆上簇にあるものなりよつて老蠶の見わけようを委細にしるし初心之人の爲にすごいへごも微妙の所は筆には盡せず唯初にいへる眠起辨色の事をよく覺へ年々心を盡て養へばおのれご蠶事明白になり凶る事なく其上種々の巧者自然ご出來して此蠶書の外の良法を發明し其地々の寶ごなる人多かるべし予が此書は養法の餘り麓略なるを嘆きて大體を述たるなり養法是にて悉せりごいふにはあらず然れごも西土ご 日の本ごの養法の善なるは書に見へたるは多く撰び取りて其上自己の養ひ試たるを著述せしなり先老蠶の見よう數多あり四眠起の桑盛り過て大に肥へ太りて背より尾に至りて上よりみれば藤花色になりたるは是老たるなり又暖年は中桑より數へて十五度桑をあたゆれば老るなり

涼しき年は中桑より十六七桑冷き年は十八桑十九廿桑迄もあり又暑年は十四桑にても上簇す是暖氣なれば桑よく食して早く老涼しければ桑喰ひ徐にして老るも徐に冷ければ桑不進にして遅し又暖暑の年は桑を常體にあたへても日數早く老るなり然れども暖暑の年桑を常體にあたへて日數早く老たるは蠶瘦て繭あしく糸少し故に暖暑の年は桑を厚く常に桑のたへざるようあたへべし左すれば如何程早く老ても食十分なるゆへ蠶大に肥るなり蠶肥へ太りて老たるは上好繭を作り蠶瘦て老たるは中下の繭を作るなり是皆桑のあたへよう十分なるご不足ごにあり又蠶沙柔らかにしてねり薬の如く指にて撫ればつぶるゝは老たるなり又手にこり明りにてすかして見れば手足より腹喉迄黄に透ごおりたるは老たるなり又腹喉のあたり一ふしすきたるは老初りたるなり一桑く一にふしづゝ透ごおうるなり又藤花色ぬけて黄光になり少し形小さく見ゆるを手にこりすかして見れば全身すきごおりて見ゆるは桑既に足りて不喰蠶沙を下しおわりて繭を作らんごするの老蠶なり蠶は食足りて老る時は不喰して半日一日一日半蠶沙を下し尿をし其後たよりを求めて口

より糸を出し蜘蛛の巢を張る如く四方へ糸を引かけ巢をはり其中にて繭を結ぶなり結ぶを作るごいふ右數條を以て見わくる時は蠶老たるごわかきご見わかるべし下蟻一日限くごはき立たるは老るも一同なり然れども一日の間も朝ご晝ご夕がたご次第に出生するものなれば眠起も一日ばかりの違ひはありて老るも同じく違ふなりよつて其心得にて上簇する時は一統に好繭を作るなり上簇の法蠶日數足りて老たりご思はゞ蠶沙をこるべし此時蠶沙を取らざれば繭あしゝ此時の蠶沙はひろげずに一枚を一枚にて置なり蠶沙を取れば動かさるゝゆへ老たる蠶は桑を不喰未老の蠶は動かされて腹へるゆへによく桑を喰ふゆへ蠶よくそろうなり蠶沙をこりて後箔中に於て繭を作らんごする蠶一ツ二ツ見ゆる是は四眠起にふり桑を食したる蠶なりひろひこりて小箔に桑を少し入れ簇を立其中へ入れ繭を作らすべしふり桑を食したるは住め桑の時跡の箔へ桑をあたへ置其後老たる蠶ありて蔞の縁又は喰たる故喰ぬけて老たるなり蠶二ツ三ツある時は箔中の蠶十に六七喉すきごおりて見ゆる是を上簇の時ご心得急に桑に水を打常に三度あたへる程の桑を一度にあ

たへ其上へ簇を立箔の四方の縁ちへわらを少しづゝ置棚へさし入置べし左すれば老たる蠶は即時に簇に上る是半分起中桑を食したる蠶なり其次は桑を一食して後一日蠶沙を下し然して後に簇に上る是桑付の桑を食し初たる蠶なり其次は再食三食して一日づゝ蠶沙を下し上簇より三日目四日目迄に簇に上る是桑付の時眠みて居たる蠶なり如此なれば老過たるもなく桑不足なるもなく老次第に簇に上るゆへ蠶沙に作りたる繭も稀に桑不足にて皮薄き繭もなく皆其蠶性有だけの繭を作るゆへ不そろひなる事なしよつて上簇の桑を水を打あたゆれば二三日目までは桑の葉枯れしなびず二日の間しなびざれば如何程の喰劣りありても皆よく食したりて老蠶となり繭を作るなり然れども下蟻あしければ大に喰劣りあるゆへに皮薄き繭多く繭を不作る蠶もあるなり此書の養法にて下蟻し蠶は如此すれば繭そろわずこいふ事なし故に上簇の桑は厚く桑残るよふにあたゆべし是を打桑と云なすたこへ打桑厚くとも水をよく打ざれば翌日は葉枯れしなびて喰ざるゆへ繭に皮薄き多く繭を不作るもあり上簇桑に水をよく打てあたゆるは古來我邦の蠶書養法に無

之事にて大秘事なり又簇は厚きによろし簇うすければ上なる蠶の尿下なる繭にかゝりて色赤き繭多し厚ければ簇にてよけるゆへに赤き繭少し上簇てより其箔を動かす事なかれうごかす時は糸に節ありて糸目少し蠶の食足りて一日蠶沙を下し糸を出してより一日半二日にて繭となり蠶變じて繭中の蛹なる但し是は一正の蠶の日數なり箔中前後の蠶ある事なれば上簇より七日目に箔をおろし箔より簇をはなしごるべしはなしごりて繭をもぎごるべし繭をもぎごるを繭をかくごいふ蠶上簇より極暖によろしごいへり是暖なれば繭を早く作り畢る涼しければ繭を作る事遅く其中に繭を不作るもあり早きは繭よくしまり遅きは繭やはらかなり然れども桑よく食したるは涼暖に不構好繭を作るなり然れども雨天にて冷氣なれば上簇蠶に甚あし、繭もまたよろしからず此時は戸障子を立家中暖なるよふに家の大小により二三ヶ所六七ヶ所其餘も見計ひ火を晝夜たくべし但し煙氣少く悪臭なき薪木をたくべし松の木などの煙氣多き木をたく時は繭の色あしく下品の糸になり炭火はよろしからず然れども薪不足ならば炭火にてもよし但し箔を離して火

鉢を置へし箔中大體繭の形に見へなば火を止へし又上簇極暖によるしこいへごも極暑には傷むなりもし極暑にてかたびらあるひははたかにもこらへがたきはごならば晝の間は窓戸障子を開きて風をいれべし左なければ繭あし、蠶上簇よりは南風をさらふ明りはあし、暗きによろし但し極暑の節は南風にてても苦しからず

收種 タネヲトル

收種は來年養蠶の根本なればよく心を付て繭を撰び蛾を産しめ種子を取べし桑新らしく樹たる株は蛾よく生じ古き株の桑を食したるは蛾少し老過たる蠶は簇の下に作りて繭文理あらく色赤く蛆多くして偶蛾となりても羽ち、れ色赤し又桑不足なる蠶は簇の上に作りて皮薄く蛾の形小さくして種子又小粒なり簇の中央に作りたるは桑よく食しほごよく老て作りたる好繭なり蛾も又肥太て上蛾なり又繭を剪刀にてわりて蛹を見るに色黄にして疵なきは蛾を生じ蛹色黒きありあるひは疵あり又は蠶の形の残りてあるは皆蛆を生ずるなり是は種を出すを業ごして人の養ひたる繭を買取蛾を出して種を取人繭數十を切りて見十の蛹皆よく蛾の形なれば十

分の蛾出ごしあしき蛹のありよふにて九分八分六分五分の蛾出を試る術なり種を業ごせざる人は切りてみる事なかれ費なる事なり切たる繭は糸にならず一ばん蠶は雄蛾多し二ばん蠶にて撰ぶべし繭の形細く長く中くびれたるは雄蛾を生じ繭の形短く太く中くびれざるは雌蛾を生ずるなり何れも文理細密に色白く皮厚く堅く艶あるを上々繭ごして撰ぶべし種子一枚を産しめんと思わ、雄繭一升雌繭一升合て二升を撰ぶべし小箔に紙をしき其上へ繭をならべ香氣なき一間に棚をこしらへさし込置蛾の出るを待へし蛾は上簇より十七八日にて生ずるなり雄蛾は形小に羽をせわしなく動し雌蛾は靜にして肥て形長し蛾生じなば又撰ぶべし色赤く羽ち、れたるあり眉毛なきあり色黒きあり瘦て小さきあり皆ひろひ出して不用色よく形よく肥たる蛾を用ゆべし蛾は生じて其儘交合ものなればつるみたるを紙上へならべ置て八ツ前よりはなれて種を産もあるものなればもしはなれて種子を産あらば連紙の上へのせて産しめ其餘のはなれざるは七ツ過に皆はなしこりて連紙の上へのすべし雌蛾ははなる、ご尿をするなれば尿して後連紙へのすべし産終り

なば別にこり置べし今日産たる蛾は雌雄ごもに明日再用ゆへからず再用ひたるは精氣薄くして種あし、蛾は出初りたる日より五日も六日も七日も出るものなれば一日きりに連紙を別に産しむべし雌蛾のおのれを離れたるは一蛾にて卵子を六百粒より八百までも産ものなり然れども七ツ過にははなれざるははなしこりて産するゆへ雌蛾の數百六十にて種一枚を積るなり又連紙の目を掛け置種のよく乾きたる時其目を量り種子十匁あれば種一枚にあたるなり産終りなば蚊張をつり其中に二三日かけ置べし乾ざる間は蚊種の液を吸ひて其種子蟻を不生あるゆへなり種色かわりて乾きなば風の入る床の間なごにかけ置十月箱にいれ收置べし蠶種連紙にあるうちは極寒によろしといへりかくして我家にてこりたる種は其家の氣候によく應じ眠起よくそろひて甚養ひよし必ず種を商ふ人にたぶらかされ他國の性もしれざる種を價を高く求る事なけれ世間の人一ツ種を年々養ひたるは飼ひがへしご名づけ繭あし、こいへり大に愚なる事なり奥州信州はいふに不及西士にても蠶を養ふ土地に飼ひがへしならざる蠶ある事なし蠶種の本場と稱する所も皆飼ひ

がへしなり是は天然より來れる蠶種なり是は阿蘭陀より年々持來る蠶種といふは一つもなし皆種うる人の愚人をまごわして云ひ初たる事の家々の言となりたること知るべし必く、他に求ずるに我家にて養たる種にて養ふへし他國より來れる種はたごへ養法残る所なく極上の繭を種にこりても國を隔てたる事なれば氣候同じからず風土になれずして甚養にくし況や種子を産しむるを世渡りとする人其利徳を貪るのみ我家にて撰ぶ如く繭を撰び蛾を撰び今日用たるは明日不用如此して種をこらんや他國より來れる上種よりは自己の取たるあしき種のかたはるかに勝れたりご心得べし又我種年々豊りて繭よしごて必種を業ごして利を貪らんご心懸くべからず如何程の巧者にても多く種を産しむるには必ず鹿略あり手ぬけたる種を人の大切なる養蠶に賣るは大不仁なり我が養ふの餘計ありて一枚二枚人に贈るは苦しからねごもゆめ、利分多きを貪りて種を業ごし多く産しむる事なけれ不知人には知りたる人おしへて種をこらしむべし初にいへる五穀の種の取よふにて蠶種の事を思ふべし五穀の種も其地になき品は他より求る事もあれご其後は其國其地に

て取るにあらずや蠶種ばかり年々他國よりもて來るを性も不知るを種賣る人の言に任せて高價を出して求るはたわけごとやいわん馬鹿ごとやいわん餘りに愚なる事ならずや是皆養法の明らかならずして豊り凶れに迷ふゆへなりよく心得て他國の人に笑わるゝ事なきよふにすべし最恥かしき事なりもし我家になきよき種は一年求て養ひ其後は其家にて取べき事に極りしこ心得べし予我家にてこりたる種を養ふ事十年餘にして年々繭よろし其外予が養法にて種をこりて養ふ人數多あれども皆其家ノノにて取りたる種にて繭よろし必ク疑ふ事なかれ

養蠶須知卷中終

養蠶須知卷下

目錄

曝繭	マユヲホス
炙繭	マユヲアブル
剉桑葉	クワノキサミヨウ
養蠶豊凶説	カイコアタリハツレノ根本
分擡	カイコヲヒロゲルシカタ
涼暖總論	ヨウキノトリヨウ
豊凶氣候	アタリハツレノヨウキ
寒冷之地養蠶	サムキバノカイコ
海邊養法	ウミベノヤシナイ
諸毒	モロモノノドク
原蠶	サイデノカイコ

夏秋蠶

三眠蠶

備考

以上十四條

ナツアキノカイコ

サンドヤスミノカイコ

カンガヘノタメ六條ヲシルス

養蠶須知卷下

曝繭

マユヲホス

上毛澁川村民 田友直 著

繭はかきこりては早く日に曝すべし箔に蔭をしき其上へならべ地上に架を高さ三尺にかき其上にてほすべしもし箔に澁紙又は厚き紙などしきてほしたるは乾く事早しこいへごも炎氣下へもれざるゆへに糸を繰にあし、又地上に箔をならべてほすも早くかわけごも是又糸を繰にあし、又世人重きを貪ほしをひかゆる者ありほしをひかゆる時は蛹に水氣ありて蒸れて色黒くなり膏澤なくなり土用にはす時は大にへりて繭壹貫目にて百目も餘計にへるなり其上多く繭にかび出るものなり又よくほしたるは水氣はなくなり膏澤は残りて蛹色よく糸にして艶よろし大體一升の繭三五六匁になりたるをよく曝たるごするなりよき天氣に七日ほごほせばよしほし終りて壹石又は壹石貳斗ほご入袋を紙にてこしらへ其中に入れ置土用の日に半日ほして貯へ置ばいつ迄も損る事なし

炙繭

マユヲアブルナリ



霖雨の節繭日にほす事ならずして日數を送る時は繭より蛆出て又蛾出る大體上簇日より十二日目には蛆出るなり是は擇て種に置たるよりは早く出るものなり此時は早く焙るべし其法土間に地爐を作る大さ箔と同じ高さ三尺にして三方を竹にてこまいをかき壁をぬり中に炭火を横に二行におき竹をわたして其上に箔を置箔上へござをお、ひ其上へ澁紙をかけ一方壁をぬらざる方へも澁紙の端を以て火氣のもれざるやうによくお、ひむしあぶりにするなりしばらくあぶれば繭にしめり出るしめりかわきて少し過たる時取かへて又外の箔をあぶるべし日出より夜四ツまでに拾四箔あぶるつもりなり火は一箔ごとに炭を繼ぐべししめりをみるも手にてそつござわり試みべし繭を動かしいびる事なかれ糸を繰にあし、火は強きによろしぬるきはあぶれかぬるなりあぶりて後天氣よくなりて二三日にてほし一升の繭の目を量りて收置べし此法色にさわらず糸よく繰安く天日にほしたるごとじ又最上の繭は至て皮厚きゆへに天日にて蛹のかわくほごほしたるは繭の日にあたりたる方日にやけて色赤く理あらく其上蛹肌は糸繰りがたしよつて最上の繭

はかくご其儘此法にてあぶりて其後天日にあてるごきは二日半三日にてよくかわくゆへに繭に日にやけしごころなく理もあしからず糸繰り易くして不殘糸になるゆへに糸目も多しためし見るべし

劉二桑葉

初て桑子をこめ桑をあたゆる時は糸の如くきざみ又横にきざみてあたゆべし初眠前は二分四方ほごにきざみあたゆ二眠前は四分四方にきるべし三眠前は一寸四方なるべし四眠前はもつごも粗くきりあたゆ四眠起よりは葉桑にてあたゆ四眠起も雨天なごにて桑の食しよふ遅くはあらくきりてあたゆべし四眠起も桑付け一日はきりたる桑よろし眠のふりくわは常より少し細かにきるべし初眠より三眠起までは蠶の生立にしたがひて起たる時は細かにきり桑盛りには粗くきり眠初りなば又細なるべし

養蠶豊凶説

アタリハヅレノ根本

世人蠶を養ふ養法明らかならざる故年々豊る人ごいへごも何によりて豊ごいふ事

を不知偶凶る、事ありて其後年々凶る、事あり又茅屋にて年々豊りたる人板屋に  
 なりて凶る、事あり涼しき場所にて養ひたる人暖なる地に移りて凶る、あり是皆  
 養法暗く豊り凶れの根本を不知るゆへなり又年々凶る、人はいよく其凶る、事  
 何の故といふ事しらず年々豊る家の人に飼ひよふを習ひ聞こいへごも其年々豊る  
 人も何にりりて豊るといふ事をしられれば其教るところも肝要の場はしらぬゆへ  
 教る事ならずしておのれ／＼が家にての飼ひよふのみ教るゆへに十人に問へば十  
 よふの養法にて何れか善何れがあしからん迷ひの起るばかりにて詮かたなく神  
 に祈り佛に願ひても豊らず終に蠶の運あし、こいふ初にいへる蠶は運にはあらず  
 豊り凶れ皆養法の善惡にあり養法あしければ神佛に如何程祈るこも神佛は何こ  
 し給んや此條下をよく讀覺て豊り凶れの根本をよくしり養法明白にして其上神  
 佛を祈りなば不虞る災難の來る事稀にして養蠶年々其益多からん不虞る災難こは  
 桑に霜蠶に鼠羽蟲家に失火なり人に病なり是は佛神に祈るべし豊り凶れは祈り  
 てもかひなしそれ蠶の凶るは四色あり先下蟻あしければ蠶死うせて不蕃息又眠起

に中桑桑付けのあたへよふおそれれば蠶飢て病蠶となりて僵る、又初眠二眠三眠  
 に眠のまへに蠶沙を不取又ひろぐるをうるさがりて厚く多く置て蠶沙にかび出た  
 るは必ず凶る、又諸の毒氣にあひたるこ此四ヶ條にて凶る、なり故に下蟻を桑子  
 を多くあたへて一日切／＼こはき立眠の前に蠶沙をこりてうすくひろげ日數に  
 不構して五分起中桑八九分起桑付と法をたがへず雨天にて起る事おそれれば釣桑  
 をいたし眠事おそれれば釣桑をいたし其上諸の毒氣を心を用ひて避除けぬれば凶  
 る、事なしこしるべし是豊り凶れの根本大略なり尙又蠶にしらねばならぬ事あり  
 元來蠶は野に生る蟲なれど野にては鳥蟲風雨種々の害あり人に益ある蟲なれば屋  
 中にて養ふ事になれり屋中にて養ふは鳥蟲其外種々の害はなれど蠶の心に任  
 せざる事數多あり皆此こころにて凶る、なり蠶の野に生じ心まかせに桑を食し心  
 まかせに眠起し心まかせに繭を作るよふにさへ養へば凶る、事なしまづ蠶は種よ  
 り生ずるこ其儘桑を食するものなるを種色かわりて蠶少々出たるを桑をあたへず  
 して二日も三日も置ゆへに餓るこいへごもしかたもなく先に出たるは皆死うせて

跡より出たるも大半は餓て死なんごする時桑子をあたへるゆへ生は生たりごいへ  
ごも病蠶ごなり初眠二眠までに死うする小さき時なればしれず蠶のふえざるは此  
ゆへなり是蠶の心に任せざる一ツなり人の生れたる時は晝夜乳をいくたびごもな  
くあたへざれば生長せず人は啼ゆへ乳をあたゆれごも蠶はものいわざるものなれ  
ばやう／＼一日に桑子を三度もあたへて置なり人の生れ子にくらぶれば不飢して  
何ごせん是蠶の心まかせならざる二ツなり蠶は生ずるより桑の葉を食するものな  
るを五日も六日も桑子ばかりあたへて置是蠶の心まかせならざる三ツなり蠶眠に  
つく時は桑の枝か葉の上にて心よく眠み上にお、ひなく下にさわりなし然るに箔  
の中にて眠ゆへ先に眠たるは其上へ桑を度／＼あたへられて桑に埋り壓され蔭は  
だより蠶沙の臭氣上り桑の葉ごごもに熱し蒸して其氣にあたるる大にあたりた  
るは黒くふすぼりて皮を脱事あたわすして死し少くあたりたるは背より尾まで赤  
色になりて起出四眠起に桑を不喰して死し又は繭を作ても赤き繭を作る是蠶の心  
にまかせざる四ツなり眠み前は上へ下さわりなく心よく眠べきを一箔に厚く多く

養ふ故に蠶ご蠶かさなり桑に桑をおふ故に桑の濕ご蠶沙の氣ご蒸してかびごな  
る眠たる蠶は死すごも起ざる間はうごかぬもの故其かびにあてられて皆病蠶ごな  
り箔中不殘僵る、是蠶の心に任せざる五ツなり眠より起たる時は人の病後の如し  
人の病後には食を貪り少しづ、度／＼好む蠶も起るご其儘桑を少しづ、度／＼好  
むを蠶の口そろわすごて桑をあたへず餓するゆへ氣候涼しき時は少し傷て病蠶ご  
なり暖暑の節は大に傷み頭すきごふりて桑を不喰して斃るなり是蠶の心にまかせ  
ざる六ツなり四度の桑盛りごもに桑よく食すべき時なるを桑を常ていにあたゆる  
ゆへ桑不足にて不肥に生長し眠につき簇に上るごいへごも上繭を作る事あたわす  
やう／＼中下の繭を作る是蠶の心任せならざる七ツなり蠶老ては心よきたよりを  
求て繭を作るべきに箔の中にあれば心よきたよりもなく簇もほごよき時に立ざれ  
ば老ては場所を不撰蠶沙の中に作りあるひは未老に簇を立られ喰んごするに桑な  
くぜひなく皮薄き繭を作る是蠶の心に任せざる八ツなり蠶は元來桑の木に生じて  
木の上にすみ其葉を直に食するゆへ生葉ばかり食するものなるに枯れしなびたる

葉をあたへ又初眠二眠にあたへる度ごに桑を摘をうるさがりて一度摘たるを三度も四度も用ゆ二眠までは桑の葉甚柔らかにして少し置ばしなびるなり少ししなびたるは蠶不喰桑しなびてくわざるを食しあきてくわざるご思ひ蠶を餓す一度摘たる桑を二度も三度も用ゆるは一度あたへたるご同じ残り二一度はしなびてくわざるゆへにあたへざるご同じ是蠶の心に任せざる九ツなり蠶は暖なれば桑よく食して早く眠み早く起る涼しければ食不進にして遅く眠み遅く起る婦人は大體同じよふに桑をあたへるゆへ暖なる時は食し不足して常に空腹なり涼しければ桑の葉かさなりて蠶沙たまる蠶沙たまれば其臭常にあしゝあるひは雨天にかびこなる是蠶の心にまかせざる十なり此十ヶ條は皆く蠶のきらふ事にて凶るゝの本なり其上諸毒をきびしくいごわされば凶るゝなり蠶はもろき蟲にて毒にあたり易し諸毒の事は末にあり養蠶に心ある人此十ヶ條ご前にいへる四色の大略ごをよく知り婦人におしへ其心得にて養わしむれば凶るゝ事なし中にも初眠二眠の間蠶沙のかびたるご暖なる時中桑桑付の遅ごは凶るゝの第一の根本なりよつて眠の度ごに

眠蠶沙をこり随分稀くひろげて眠ますれば蠶沙かびる事なし初眠はくれながし二眠は中桑を兩度あたへて八分起にて桑付け三眠は五分起中桑八分起桑付け四眠は五分起中桑九分起桑付けご心得雨天にて眠み起おそくば釣桑をして養へば凶るゝ事なく三眠起四眠起の桑盛りを桑十分に朝迄桑の残るよふにあたへ上簇を右之法にてあぐれば必ず上々繭を作るなり此所さへよく知るごきは豊り凶れ自ら明白ならん

分擡

蠶ヲワケヒログルヲ

分は蠶をわくるなりひろげるをいふ擡は蠶を持あげて蠶沙をこるをいふなり蠶は下蟻の精密ご不精密ごにてふへるに甚多ご寡ごあり然れごも此書の法にて下蟻れば大體損失ある事なし初眠は大箔三枚に小箔に三ツ四ツなるへし二眠は初眠の一倍にひろげべし三眠は随分うすく一箔を三箔にひろげべし四眠は三眠の一倍にひろげ上簇るは四眠の一倍にひろぐる是大略なり尤見合せにあるべし兎かく蠶はうすきはごよしうすければ皆よく喰そろひて繭よくそろふなりあつく多きは如何

程桑をあたへても其桑蠶の下になり蠶沙こごせと尿いばりによこれぬれば蠶不喰くわじやうゆへ自然と喰劣をかりありて繭も柔らかなる多おほし蠶沙をころは眠やすみの前に一度起おきるこ一度づゝ眠やすみと眠やすみこのあいだに二度づゝころべし

涼暖總論

アツキサムキヨウキトリヨウ

此書より前に出たる蠶書に蠶は寒冷さむかには傷いたまぬものにしてあたゝむる時はあしゝこいへり又一書に蠶は寒冷さむかは毒どくなりあたゝむるをよしとすあたゝめざるはあしゝこいへり今世の人の蠶を養ふを見るに多く此兩道りやうみちに迷まよふ夫氣候ふうきぎの事暖暑あたたか之年十年十五年つゝ事あり蠶は寒冷さむかには傷いたすあたゝむるはあしゝこいへるは此氣候このきぎのあいだに養ひ覺おぼたる人の出せし書なり又冷涼さむかの年十年餘つゝ事あり蠶は冷氣さむかは毒どくなりあたゝめねばならぬこいふ人は此間の氣候このきぎに養ひ覺おぼへたる養法やしほなり是皆いづへん一偏いつへんの見識けんしきにして何れも涼暖りやうだんをよく知したるの論ろんにはあらず蓋蠶けだしがいじは暑しよに傷いたみやすく又冷さむかにも傷いたむなり夫蠶そのさにあたゝめずすゝしくせずしてよく豊ある氣候きぎの年あり是を目あてこして其餘そのあを斟酌りやうけんすべし下蟻したぎより初眠しつやすみまでは朝夕布子たふし一ツ晝ひる給あ二眠ふより三眠ふま

では朝夕晝あにも給あ三眠ふより四眠ふまでは朝夕給晝あはひごへもの四眠起ふよりは上簇あ迄朝夕あひごへもの上簇あよりは晝あはかたびらにてもよろしきくらひの氣候このきぎ如此段このくわん々だんあたゝかにして氣候このきぎ順じゆんなればあたゝめずすゝしくせずして大上々の涼暖りやうだんなり是より暖あたたかならば其心得このこころえにて右にいへる常法じやうぽうよりまして度々桑をあたへ是より涼あしくば窓まどをふさぎ戸障子せうじをたて至いたりて冷さむかくは火をたくべし下蟻したぎより初眠起しつやすみまでは寒冷さむかに傷いたむ事は多く暖暑あつさにあたる事は少すくなし三眠ふより四眠ふ上簇あは暑あつさに傷いたむ事は多く冷さむかにあたる事は少すくなし然れども大冷大暑おほいさむかおほいあつさ暴風霖雨ぼうふうりんうは常になき非常ひじやうの變へんなり非常ひじやうの變へんある時は隨分心を用ひて其氣候このきぎを避さべし人は冷さむかければ衣服いふく爐火ろびにて寒冷さむかをしのぎ風かぜと蔭扇子ひかげあふぎにて暖暑あつさを凌しのぐ蠶も人の身の心得このこころえにて養ひ氣候このきぎを取とべし蠶は暖あたたかなる所は桑かよく食くし眠起やすみおきも早あし涼あしき所は桑喰かひ遅おそくして眠起やすみおきも遅おそし一家いけつがいにても暖涼あたたかあは違ちがふものにて二階にかいは暖あたたかにて下したは涼あし南みなみの方は暖あたたかにして北きたは涼あし二階にかいも板屋いたやは上棚うはたなは暖あにて下棚したなは涼あし同日おなじひに下蟻したぎたるも涼あし暖あしにより大おほに早あきと遅おそきとあり其心得このこころえにて遅おそき早あきに不構かまして五分起ごぶんおき中桑ちゆうさ八九分起はちくうぶんおき桑付さうづけをたかへべからず其蠶そのさの眠起やすみおきのも

よふにて桑をひかへたりあたへたりすべし又二階は上へ下を度々さしかへ北と南をおきかゆれば蠶そろふ下も同じ初眠二眠は紙帳を棚にかけて其中にて養へば埃塵煤をよけ冷氣をしのぐによろし又大暑の時にあらざれば蠶に風はあしく別て暴風をきらふもし暴風あらばよく戸障子をたて蠶を其氣にあてべからず氣候の事は是にて得心すべし

豊凶氣候

凡養蠶一村一統に豊り又一統に凶る、年あり是は養法によく熟したる人にはあらず常の人の養蠶なり夫蠶下蟻より上簇まで天氣よろしく雨ふらざれば一統に蠶よし是は眠起に露桑を不喰蠶性よく生立ちし故なり又初より冷からずして涼しく雨ふるごいへごも霖雨なく氣候のついて順にして涼しきより暖に暖より少し暑く大なる暑なき年は蠶よろし又初眠二眠のあいだ甚寒冷にて度々霖雨なる年は蠶一統に不蕃息也是は下蟻おろそかなる上ぬれ桑にて蠶沙かびるゆへなり又下蟻より度々霖雨あり殊に三眠四眠上簇にぬれたる桑にてあげ前より甚寒冷に雨天なれば

一統にあし、又初は大きにあたゝかにして俄に冷く忽暖暑に又忽寒冷に不順氣なる年はあし、又霖雨の晴れたる時大暑にてあつさこらへがたく又三眠四眠大暑にかゝる時は蠶あし、年々種々の氣候ありごいへごも此數ヶ條を以て考へれば知る、なり養法に熟したる人は如何様の氣候にても豊るものなれば是は無用の事なれごも初心の人の考への爲し、是皆養法の麁略なるゆへ豊凶ありご知るべし此書の養法に熟すれば凶る、事はなきご知るべし

寒冷之地養蠶

深山の地又は大山の麓其外高原の地尤も寒冷の場所にて霧ふかき村里にては霧ご寒ごにあたり蠶傷む事あり其場所にては蠶出生前に其用意をなし不煙薪なら。さくらはんの木。くぬぎ 類をおくご、のへ置不斷其家にて火をたき夜は火鉢に火を置又は圍爐裏に朝迄火のあるよふにたくわへ家内に火氣のこもるよふにすべし左すれば暖なるのみにあらずいかよふの雨天にても濕氣霧氣内より火氣にて押すゆへに入る事なく蠶傷ざるなり火の加減は涼暖の論にて斟酌すべし又寒地に

て蠶初生の時寒にあたり死うするを毛に立こいふ是又養法の麁略なるにあり蠶は人身と同じ風寒にも傷み暖暑にも傷む人は衣食にて風寒暑をしのぎ蠶は桑葉にて衣食とし又寒暑も桑葉にてしのぐ人の身空腹なれば少し風寒暑湿にも傷む蠶も桑不足なき時は傷む事なし唯桑のあたへよふ麁略なるゆへ傷こ知るべし桑の葉は暖暑なればしなびて枯れ寒冷なる時はしなびずして液汁なく枯るゝなり殊に二眠前は桑柔らかにして少し置ば枝るゝなり枝れたる桑は蠶死すこも不喰此時冷ければ傷むなりよつて寒涼の地は家のまわりに桑をうへ置て下蟻より二眠までは桑をあたへる度くにあたらしくつみてきざみあたへ又夜桑にあたえんと思ふ桑枝は晝の間にむしろにて其木をつみ置て露霜風のあたらざるよふにし下蟻より初眠起までは夕飯後一度あたらしくつみてきざみあたへ四ツ時一度あたらしくつみてあたへ八ツ時起てまたあたらしくつみてあたへし其外箔には紙帳をかけ爐に火を不斷たやさずして其側におく時は如何程寒き節なりこも蠶傷む事なし況や桑は寒地は遅く氣候あたくかならねば不<sub>二</sub>生發<sub>一</sub>ものなり如何程寒地にても桑葉開き蠶

發生する節は暖なる節なれば養法手ぬけなければ毛に立事なし毛に立は皆養法の麁略なりこ知るべし然れども寒地には夜に至りて非常の寒冷時によりてあるものなれば其節は火をたきて寒をよけ又霜風にあたりたる桑は直にあたゆれば蠶に毒なりよつて其枝をむしろにてつみ置てつみあたへもし尙又風寒ならばつみたる葉を箆こゝもに少し火にあたくめ寒氣をぬきてきざみあたゆべし火にあたくむるは少し寒氣を去るのみなりしなびるよふに火にあつる事なかれ蠶に桑たへざる時は毛に立事なし然れども寒冷の夜は火を不斷たくべし

海邊養法

蠶は桑の出生する地にては何方にても養ふべし海邊又は島なごにて養ふには何方にても其土地の山ある方へ窓を開き潮風を避て養ふべし潮風は蠶に甚毒なり潮風こいへごも山を越來るは苦しからず然れども蠶は總て風を除べし

諸毒

蠶は生質善良にして微弱なる虫なれば毒にあたり易したごへ養法詳らかに手ぬけ

なしこいへごも毒をよく防ざれば數月の心勞一朝に廢る事あり必々慎むべし  
一蠶種をこりあつかふにも手をあらひ鹽氣油氣其外いろひ氣なきよふにすべし又  
桑を刈り桑をもぎ其外蠶の事にかゝる度々よく手をあらひ衣類は清淨なる濯衣  
をきるべし

一四度の眠ごもに雨天のぬれ桑をきらふ又四眠起は露桑を好むこいへごも夕立雨  
にあひたるぬれ桑を電のふりたる時のぬれ桑は甚毒なり此時は桑をもぎたる葉  
を一所にかさね置ば少しあたゝかになるをあたゆべし左すれば雨の毒氣ぬける  
なり但し熱し蒸れたるはあしゝ又初眠二眠に朝桑をあたへる時日の出前に葉を  
摘む此時霜ふり又は至て寒冷ならば摘たる葉を笊にも少し火にてあたゝめ寒  
氣を去りてあたゆべし霜氣寒氣の露を含みたるは蠶に毒なり此數事は世人のし  
らざる事にて桑に生ずる毒なり右之桑に生ずる毒にあたりたるは蠶色かわらず  
して死るなり黄なる水を吐て死るは煙葉の毒にあたりたるなり

- 一榎の木
- 一茱萸
- 一皂莢
- 一杉
- 一胡桃
- 一榧
- 一檜ノルイ

右之外臭香ある木は總て火にたくべからず又竹を焼もあしゝ

一魚を煮又は炙る事甚あしゝ  
一竹の子を煮べからず  
一蠟燭を蠶の近所  
にて吹けすべからず  
一青松葉をたくべからず  
一煙草  
大毒なり

一藥を煎ずる事なかれ  
一蠶を不養家にてせんずべし  
一雄黃  
一硫黃

一薰陸  
一麝香  
右四種大毒なり其外藥種は總て忌べし  
一朱を火に入  
るゝ事  
是は人にも大毒なり  
一雌黃  
是又火に入べからず  
一廐の二  
階にて蠶を養ふ事なけれ  
一鳥獸の肉を焼又は煮る事甚あしゝ  
一鐵砲の

一羽毛髮革の類を火に入るゝ事あしゝ  
一魚油をこもす事あしゝ  
一鐵砲の  
音鐵砲藥の匂ひ甚あしゝ  
一油を煎ずる事あしゝ  
一鹽の氣

一五辛  
大毒なり手にふれ又は蠶の道具にいろわぬよふにすべし  
一春事す  
べからず  
一鉦鑼乳鉢大鼓  
其外あらげなく音のする類を忌  
一不淨の

女又は死葬の事ある人を近つくべからず  
一火葬を忌なり養蠶の國は蠶  
中は皆土葬にするなり



右諸毒の大體をしるす尙又考へて毒ならんと思ふ事は皆防ぎ避へし

原蠶

サイデ蠶

原蠶は再出の蠶にて收種の法にて産しめたる種より十日餘過て一枚の種より五疋十疋廿疋つゝ出るものなり養法よき種には必ず出生するものなり暑氣なれば十七八日にて繭を作り涼しければ廿一日二日にて繭を作る僅の日數の中に四度眠起して繭を作るなれば桑のあたへよふおろそかにては生長せず下蟻より一日に十四五度つゝあたへ毎日蠶沙をこるべし三眠起よりは桶に水をいれ摘たる桑の葉を其中にひたし置蠶の喰ひ次第に桶より取出し露をふり落としあたゆべし最上の繭を作るものなり其繭を又蛾を出して種を産しめたるは來年大に養ひよく豊るなり然れども其時は種に取べからず皆々再出となるなり

夏秋蠶

ナツコ

夏秋蠶是今の夏蠶なり是も西土に三眠にて 日本は四眠なり 和漢にも一年に三度繭を作るなり初出は本蠶と同じ二度目は原蠶と同じ三度目は八月にして

桑葉甚剛くして多はよからぬものなり殊に夏蠶は繭あしくして糸にはならず綿にするなり本蠶を多く養ふ場にては來年の桑を傷ふゆへ養ふべからず又桑澤山にして本蠶を養ふといへども毎年桑の餘る場所にては必ず夏蠶をも養ふべし本蠶より甚養ひ安きものなり二度目は原蠶と同じく大に桑を度々あたへべし淮南子曰原蠶一歳再登非不利也然王者法禁之爲其殘桑也ごあり是は原蠶ご夏秋蠶ごを一ツに云ひ込めたるなり本蠶の障りごなるゆへに何れも禁制ごみへたり

三眠蠶

三眠蠶は四眠蠶の變生にて三眠にて繭を作るなり別種なりといへども蠶を多く養ふ時は其中には必ず五ツ十ツあるものなり 日本は土地四眠蠶によろしと見へたり諸國ごもに昔より四眠蠶なり三眠蠶も稀にはあれども其繭を種にこり置は來年は皆々四眠ごなるなり西土は四眠もあれども三眠蠶土地に應じ一統三眠を養ふ故に西土の蠶書は皆三眠蠶の養法なり四眠の養法もあるあれども此書に原蠶夏秋蠶をのせたる如く少しあり故に宋の謝疊山の

詩三眠三起の句あり 日本にては四眠土地に應ずるゆへに三眠の繭ありといへ  
 ども糸にならず繭あしく予が家先年三眠蠶の繭二十粒計ありしに先人は種にこ  
 りてみるに翌年は四眠となりて甚繭よしよつて又其繭を種にこりつゝ養ふに三年  
 は四眠蠶にて甚繭よろし四年目には皆三眠蠶となりて小き繭を作りて糸になら  
 ず大に桑を費したり是四眠によるしき國ゆへ三眠蠶といへども四眠になりたるな  
 り然れども元來三眠なるゆへに終には三眠と歸りたるなり三眠の繭は如何程桑  
 をあたへても繭少小ふして糸にならず是土地四眠に相應なる事明白なり後の奇  
 を好むの人西土の書を讀て三眠蠶に利あるべしと思ひ養ひみる事なかれ桑の費な  
 り

備考 六條

世の人蠶四眠起より上簇迄に桑の葉に酒を打あたゆる人あり是何のゆへといふ事  
 をしらず或はいふ毒けしなりと予いまだ試す又西土の書にも見あたらず又糯米を  
 すり水にかきて桑に打あたゆる人あり繭糸目多しといふ是は西土にもあり然れど

も西土にてもちゆるは糯米にはあらず粳米なり粳米を寒の水にてさらしたるを粉  
 にして桑に水を打其上へふるひにてふりかけてよくかきまぜてむらなきようにし  
 てあたゆるなり熱毒を解し糸多くして繰易しとあり但し四眠起の桑盛りに用ゆべ  
 し糯米を用ひたるは糸を繰にたちあし

西土に八月の桑の葉の黄にならざる青き葉を多く摘り陰乾にして置寒中搗て粉  
 にし絹ふるひの細密なるにてふるひ貯へ置蠶の四眠起に用ゆる法米粉と同じ  
 是又蠶の熱毒を解し糸多くして繰易く又大に桑の不足を補ふとあり予試に是を用  
 見るに蠶も甚好むと見へて桑の葉より其粉を嘗盡して後葉を食すなり繭も粉をあ  
 たへざる繭と同じく少し糸目は多し是は摘置て用ゆべき事なり葉を摘ぎき莖を  
 少し残るよふに摘取べし左すれば木に傷みなく來年同様に萌出るなりもし葉をか  
 きこりたるは來年の芽出にさわるものなり原蠶夏蠶にあたゆるも皆々莖本少し殘  
 して摘ごるべし跡へ不傷るなり

養蠶の家にては好猫を大家にては二疋三疋小家にては一疋必ず飼ふべし鼠の防ぎ

は猫ねこにあらざればならぬなり鼠防ねづみよせぎの術色々ありといへども猫ねこの利便りべんに及ぶ事なし  
但し猫ねこは蛾ひるを好みて食たくするなれば種たねを生うましむる時は心付くべし猫ねこにも蠶まを食する  
あり但し稀まれなり大體は蠶は食せざるものなりよく撰えらんで飼かふべし

蠶に黒きあり是は白好繭を作るなり足黄なるあり是は黄なる繭を作る黄なる繭は  
糸も黄なり然れども白繭の糸より劣れり

繭に數種あり白黄青の三色あり大小の二種あり黄繭は糸強しといへども上品の糸  
にはあらず青繭も同じ大繭の類は俗に八人枕やちんまくらといふ又大黒繭おほくろまといふ至て繭大  
なり然れども皮薄く糸をぬくにあし、白繭小繭は今信州奥州上州にて養ふところ  
の繭なり其形小しといへども皮厚く糸多く上品の織糸になるなり其中に又大小の  
二種あり大繭おほまと云ひ小繭こまと云ふ小繭は一疋の蠶の作りたる繭なり上品糸となる  
大繭は蠶二疋又は三疋よりあいて一繭を作りたるなり中品の糸となる絹太織によ  
ろし

種を産しめたる蛾は二尺計に穴を堀其中へ入れ置上へ草をおくひ蟻鳥蟲の付ざる

よふにし四五日過て蛾死し終りて後穴を埋むべし人に益ある蟲なれば蟻鳥の食こ  
なす事なかれ

寛政六年甲寅八月七日奉

政府之命獻之

養蠶須知卷下終

養蠶詩

養蠶詩十二篇

目錄

蠶始 其一  
擘黑 其四  
三眠 其七  
收種 其十

擇種 其二  
初眠 其五  
四眠 其八  
成帛 其十一

下蟻 其三  
二眠 其六  
上簇 其九  
桑政 其十二

上毛澁川村民 田友直 著

養蠶詩

蠶始 其一

茫茫上古蠶桑事。飼養始成保食神。西仰軒轅製服起。東尊雄略樹桑新。大帶朝衣卿子婦。紘纒玄統后夫人。繰織豈徒寒女業。無窮靈德庇君民。

註

第一二句

上古無蠶。吾東邦至保食神始出。五穀及蠶牛馬祀稱稻荷山明神。

第三四句

西土黃帝軒轅氏之元妃。曰西陵氏始教民蠶。吾東方雄略天皇之御宇。皇后親飼養於蠶。又命郡國而樹桑。

第五六句

國語載皇后親織玄統冠之垂前後者。侯夫人織玄統纒冕曰紘。紘纒之無綏者也。從下而上不結。纒冕上之覆也。卿之內子為大帶。大夫之命婦成祭服。列士之妻成祭服。朝服從士以下衣其夫古之制也。是皆親蠶親織而後為之也。

第七八句

祭義曰古者天子諸侯必有公桑蠶室。近川而爲之。築宮仞者三尺。棘牆而外閉之。及大昕之朝。君皮弁素積。卜三宮之夫人世婦之吉者。使入于蠶室。奉種浴于川。桑于公桑。風戾以食之。歲既單矣。世婦卒蠶。奉繭以示于君。遂獻繭于夫人。夫人曰。此所以爲君服與。遂副禕而受之。因小牢以祀之。古之獻繭者。其率用此與。及良日。夫人纁三盆手。遂布三宮夫人世婦之吉者。使纁遂朱絲之。玄黃之。以爲黼黻文章。服既成。君服以祀。先王先公敬之至也。○按此是蔽膚防寒之本。所以教民也。王后侯夫人猶然。况其下乎。明矣。繰織之事。特非貧民之業。總是婦女之所功也。於乎。蠶桑之德。文於上。煖於下。實可謂無窮矣。

擇種 其二

天降神物。寓儻蟲。結繭類多。蠶獨雄。卵肥光澤。須蕃息。粒瘠黯枯。眞寡功。偏厭懶蛾。生疊拙。可知良種。有班紅。莫令冬雪輝。連紙一映春。來蟻子空。

註

第一二句

儻讀如保。荀子蠶賦云。有物於此。儻々兮。其狀屢化如神。李時珍曰。蠶孕絲蟲也。種類甚多。有大小。白烏。斑色之異。其蟲屬陽。喜燥惡濕。食而不飲。三眠三起。二十七日而老。自卵出而爲妙。自妙而爲蠶。蠶而繭。繭而蛹。蛹而蛾。蛾而卵。卵而復妙。亦有胎生者。與母同老。蓋神蟲也。南粵有三眠。四眠。七出八出者。其繭有黃白二色。爾雅云。蠶桑繭也。雖由樗繭也。蠶繭也。棘繭。藥繭。皆各因所食之葉命名。而蠶即今柔上野蠶也。今之柘蠶與桑蠶並育。即棘繭是也。凡諸草木上皆有蠶。蠶之蟲食葉。吐絲。不如蠶絲。可以衣被天下。故莫得並稱焉。

第三句至五六句

卵粒圓肥而光澤。此好繭蟻之所生。好養蕃息。卵粒瘠小。而其色黯枯。此粗繭蛾之所生。不好養而半收或凶。又種子殊疊堆者。此蒸繭蛾之所生。最爲下種。上好之種。必有淡紅之班粒。

第七八句

天工開物云。勿以下種。連映於雪。一映則空。

下蟻 其三

萌芽稍綻暮春。天糊紙箔中覆種連。卵子生蟻蟻萬萬。桑花散粒粒千千。莫將鵝翎掃初出。須守風寒防四邊。眠起不齊且多少。此時疎密一令然。

註

第一句 蠶初生。黑如蠟子。故曰蟻。下從連紙移糊帛上也。西土以穀雨為候。吾邦信毛與以八十八夜為候。蓋在穀雨立夏二節中。暖地速。寒地遲。皆

以桑葉如錢為候。

第二句 發生前。蠶種變色。預以淨紙糊合。布于小箔中。若蟻一二生時。採桑花。未開者。掌裏搓之。為粒。摻于紙上。却以蠶種覆於紙上。則生蟻聞香自

下。今民家從連移紙上。必以蠶翎掃撥。大損傷初生。此法不及以蠶翎而掃撥。

第三四句 初生之形象。

第五六句 蠶翎之事。既在前。蠶初生。宜暖不宜寒。空戶忌風冷。

第七八句 眠起不齊。必因下蟻不精。下蟻之法。蟻初生。其日必下。下而與桑花。一時必一頓。翌日自日出。夜半凡八回。日日生蟻如此。懶惰婦女。自

下。故眠起不齊。或以蠶翎而下。多損傷。此類皆不蕃息。又凶基。須切慎始。

擘黑 其四

婦人須識養蠶中。切戒白磨縫織功。撫育纔勞五旬意。收成自澤一年。豐。蟻生三日。剉青葉。鵝翎雙根分。黑蟲桑子八回。桑葉十。朝朝擘之。引和風。

註

第一二句 下蟻後三日。分擘黑。蟻而布中箔。如小碁子大。而後飼桑葉。曰之擘黑。蠶飼養之要。實在初眠前。蠶婦莫須更離蠶箔之側。則養法精密。而成繭必豐。



第三四句

自下蟻至成繭凡五十餘日。農桑家必以蠶利充半年之產。故蠶豐則其年必豐。

第五句

自下蟻至三日以桑花養焉。孽黑後。初與桑葉葉判如縷。桑花又不與。

第六句

二翎莖。自蠶沙下揭舉之則蟻不損傷。移于中箔孽之如小基子而後摻與細葉。

第七句

桑花一名桑子。孽黑前飼桑子。是本可飼桑葉而與桑子則大補助。桑葉且萎遲。故一日八頓。桑葉易萎。故增二頓。頓度也。一度曰一頓。

第八句

孽黑後。一日一頓必孽之。否則蠶沙鬱蒸而蟻生病。

初眠

其五

蠶稍將眠前一日。分擡預是鬱蒸。防淨糠薄散如微雪。細葉輕摻似重霜。六頓飼終傾箔子。兩邊羽捲移蠶桑。布安別蓐須稀少。與食頻々眠起康。

註

西土名初眠。曰頭眠。

第一二句

眠蠶之變也。變窮而化繭。夫蠶將眠。其色純黃。結嘴不食。一日半若二日。滿身退皮。其色白光。是起蠶也。下蟻後。暖而七八日。涼而九日。

十日初眠。眼前一日分擡。分孽也。擡揭蠶也。見變黃色。而分孽于別箔。否則蠶沙鬱燠。眠中多傷蟻。

第三四句

將擡前日午後。以潔淨粟糠。稀摻于蟻上。而與葉六頓。明朝傾箔。兩婦持鶯翎捲蟻。則蟻無遺漏。急移布于別箔。遲則蟻燠。燠則生病。此

法甚便。而寡勞。重霜摻糠上與葉也。

第五六句

既見于上。

第七八句

蓐布箔草席也。布箔不稀少。葉重疊而惡于眠。眠前飼葉必薄。必頻眠。安起康。齊眠則住食。半起而一投。桑八分起。而又與葉。從是後飼。

如常起後歷一日。又分擡。

二眠

其六

蟻形一變，稍既白。滿箔皓皚如雪霜。向食頻頻背青色。臨眠漸漸體黃光。退皮僅帶藤花美。起口偏思桑葉良。若遇陰霖疾擡替。淨薪熟火節溫涼。

註 二眠西土謂之停眠

第一二句 起蠶其色白。既而滿箔皆起。則望之如霜。皓皚白也。言其形狀。

第三四句 蟻生色黑。故有孽黑之名。四五日而稍白。稍青。將眠其色黃光。起則白光。而背帶藤花色。四眠皆然。故青光者厚。與葉黃光減。葉住食。白色帶藤花色。者宜薄飼。

色帶藤花色者宜薄飼

第五句 蠶眠則脫皮如蛇。脫皮則白色。帶藤花色。是則起蠶。

第六句 起蠶口極大。飼葉宜新宜柔。否生病。

第七句 陰雨寒涼。食葉遲。則葉重。累生鬱蒸。故雨則疾擡稀布。

第八句 蠶少時好暖。眠起好暖。故陰雨寒冷。或燒淨薪。或置熟火。宜節其溫涼。極熱則又傷蠶。

三眠 其七

二眠既畢。三眠近。虎伏龍騰。體日長。起拾白光。爰住食。眠移青色。另與桑涼。遲暖速。頻勞志肥。替變擡偏益忙。多少繭成。此時識。半投九飼。勿相忘。

註 三眠西土謂之大眠

第一句 形狀

第二句 晉楊泉蠶賦云。逍遙偃仰。進止自如。仰似龍騰。伏似虎趺。

第三句

三眠時齊蠶。其法。蠶黃光而就眠。此時飼葉頻薄。則葉不累。頻則蠶易眠。一日半二日而起。蠶出焉。起蠶出則拾之。拾之三四回。起蠶多不可拾。於是時住食。拾蠶入別箱。與桑白光言起蠶。

第四句

眠蠶住食後。箱中有青光者。是未食到之蠶。亦拾之入別箱。與桑桑到則亦眠。涼則食遲。暖則食速。速則慮葉盡而蠶飢。遲則葉累而蒸煥生焉。肥長則須稀移而與葉尤厚。眠起蠶變化也。一變化每每擡之。故男婦

日益  
關忙

第五六句

俗語曰。三眠十箔。繭成又十箔。多少以三眠卜焉。大概不差也。養蠶家。眠蠶不悉起。則不投桑。悉起而與桑。謂之中桑。而後又住食一日或一日半。而飼葉。故飢蠶多不繭成。凶蠶職是之由。或以涼年住食之日數。用為暖年暑年之法。則遂有遇于合箔皆斃之凶。是皆養不明。而不辨於暖暑則眠起疾速。冷涼則眠起遲澁之所致也。是以予養法。不特日窺半起。投中桑。是使先起。蠶不飢也。四眠皆然而後初眠。則八分起。而又投桑。自二眠至四眠。九分起。而與桑。自是以後飼如常。或云。如是蠶不齊。不然。蠶不飢。則

第七句

其性健。健則食進。縱有二分眠。蠶上簇。用一投三頓之食。則前後遲澁皆齊。故半起中桑。九分起飼葉。則雖暑熱。蠶不損傷。但初眠幼稚。故八分而飼。蠶諸病生於飢及蠶沙鬱蒸及眠起濕桑雨中濡桑。

第八句

蠶不可食之葉。帶承雨露。既濕。又急雨濡葉。最毒蠶。凡濕葉濡葉。製之法。芨葉堆上。又以芨覆之。少時。內發蒸熱。甚則損葉。審其得所。啓之。芨覆而攤之。濕濡隨溫而化。即可飼之也。凡濕濡葉寒。蠶食寒葉。則變褐色。水生瀉。臨老則浸破。絲囊不可抽。繅也。又為風日所嬌。乾之葉。蠶食之。生腹結。又洩臭之葉。即生諸疾。斯二者無可製之法。棄之可也。以上農桑輯要所載。試之有驗。○嬌字未詳。洩染惡臭也。

用葉

其性健。健則食進。縱有二分眠。蠶上簇。用一投三頓之食。則前後遲澁皆齊。故半起中桑。九分起飼葉。則雖暑熱。蠶不損傷。但初眠幼稚。故八分而飼。蠶諸病生於飢及蠶沙鬱蒸及眠起濕桑雨中濡桑。

四眠 其八

漢地三眠我四眠。莫疑風日土宜然。起後投桑求濕潤。睡中與食欲。乾鮮青光不得縱肥大。黃老何能為好堅。覺蠶若有飢憂色。上簇必看腐穢連。

欽按群  
玉韻譜  
媽通燁  
火起貌

註

第一二句

西土多三眠。四眠亦希有焉。吾邦多四眠。三眠亦間有焉。是蓋西土地應于三眠。我邦地應于四眠。予家先收種於三眠。翌年皆四眠。

三年之後。又為三眠。繭小不成絲。大費桑。其後不養。是本三眠。而地應四眠。故四眠而本三眠。故復于三眠。三眠者。不成絲者。不應于風土。故矣。

第三句

蠶四眠後。宜濕葉。每々以新汲水。注葉以飼焉。否則絲少。而無光澤。雨。霽則暖且暑。暖暑則食速。易老。是以好暖。而涼而遲老。則絲多。繭堅。暖暑而疾老。則絲少。而繭輕。是涼食。濕葉。且能食足。故也。暖暑則乾葉。且食不足。故也。故。霽且暖暑。注水於葉。且厚飼。食足而繭堅好。而有光澤。暖暑年必用此法。而涼冷年。高地風寒之家。宜斟酌焉。蠶四眠起後。雖好濕葉。而霖雨驟雨之露。最寒冷。此時必用前法。以覆葉。除寒冷之氣。以飼焉。尤在臨機而應變。

第四句

自初生至四眠。悉皆忌濕葉。眠中最嫌。只欲新欲乾。

第五六句

四眠後。青光最可厚飼。此時食不足。蠶不能肥大。雖老瘦小。繭皮薄。

第七八句

覺起也。蠶飢則斂。起蠶飢上。簇必不成繭。伏尸腐穢。汚及餘繭。余故半起。與中桑。九分起。飼如常。然則蠶無飢。決無此弊。

上簇

其九

四眠齊起。與桑後。十有五。澆方。膳時。滿體玲瓏。登簇速。細絲光澤。結衣奇。老過却。怪枯龜繭。嫩少必驚。涼薄皮。須用一投。三頓食。引前遲。澁得相宜。

註

上簇。使老蠶為繭也。簇以茅草。又禾稈。作之。散布於箔上。蠶上之。為繭。故曰上簇。

第一二句

膳上簇也。起蠶大。概十有五食而老。

第三句

蠶老則黃光透徹。吐絲求簇。此時膳則速結繭。

第四句

蠶登簇吐絲。結成繭。

第五六句

過老吐絲而費。且成繭於簇下。故蠶沙鬱蒸。繭理粗而色黃枯。或赤枯。又嫩少未老。到則不得己。而上簇結繭。故皮薄而形小劣。但要得

宜其

第七八句

結繭好惡。一在上。簇過老與未老。俱不為好繭。予為之用。一投三頓。食而上簇。遲速前後。皆得其宜。其法。夫蠶老到則不食而糞。半日或一日而後吐絲。結繭。故食數既足。繭緣吐絲。求簇。蠶一箔。一二有焉。此時箔中老蠶十之六。食不足。一二頓之蠶。十之二。食不足。三頓若五頓之蠶。十之二。未自有此後者。也。此時為期。注水桑葉。用三頓之食。一頓與之。而布簇。桑葉注水。則三日不萎。食不足之蠶。飽食老到。以次上簇。是故遲速各得其宜。滿箔皆好。堅世拾老蠶而上簇者。間多焉。是雖良法。未免吐絲之費。及枯粗之繭。予法。蠶書所未發明也。讀者勿忽諸。

收種 其十

膽蠶巧作蜘蛛術。合箔頻催珠玉連。慢圓雌體腰肥厚。細尖雄形腹瘦堅。簇頭皮薄。豈佳種。草下蛆多。且粗綿。宜擇中央濃密。理生蛾遺。

卵備來年

註 擇繭收種

第一二句

蠶膽後吐絲繭成。其狀一似蜘蛛。簇中繭成。望之恰如白玉。

第三四句

雌繭圓慢孕大。雄繭細尖緊小。擇宜各等。蛾生雄雌亦等。

第五六句

簇中在上者。多是皮薄繭。不可擇也。簇草中在下者。是老過蠶。蛆多絲難。緣徒為綿。

第七句

簇中央者。食足好堅。其中最擇。文理細密。厚白光澤。

第八句

繭生蛾。蛾肥白者。最良。若有拳翅。秃眉。焦脚。焦翅。赤色。黑色。黑紋者。皆病。蛾不可用也。母病則子必病。病蛾豈有佳種哉。收種。是來歲養蠶之。初基。種良。則蠶良。最可擇。良繭。良蛾。是蓋。胎教。先務。蠶家不可不知也。宜盡意焉。

成帛 其十一

竹簾窓下幽閑女。煮水擁薪徐巧思。沸沸釜中雲起繭。纖纖指上霧生絲。機梭新製裝尊體。針縷妙工文麗姿。縱不齊紈霜雪色。厚被暖服煦年衰。

註 成帛者蠶事之終也。

第一二句

少女所繅絲。織而良。老婦所繅絲。粗而劣。是蓋由手指之剛柔也。故繅糸貴少壯。

第三四句

釜繭從煮而起。如雲。抽絲從指而揮。水似霧。

第五六句

絲成而後經之緯之。而後上機梭送緯絲之具。自布帛至羅綾綺錦。皆出于機織。上織以服尊貴。下織以蔽衆庶。自縫而繡。皆針縷之所

製。施又以之。都雅於其態度。

第七八句

齊之紈素者。清織也。粗工下織。又蠶絲之所製者。可以煖於衰老之人矣。

桑政 其十一

菑地栽桑將養老。戴星帶露爰荷鋤。不疑問祿先勞實。莫作偷生衣帛虛。史稱萬株千戶富。孟論五畝一王初。春風梅雨陶鎔至。綠葉柔枝鬱沃如。

註

桑者蠶之食也。將養蠶。預先栽桑。桑二束半。蠶養一箔。故桑多貯。則蠶利亦多。陸田十畝。種桑周匝。凡三百株。糞培繁茂。凡可三十束。多寡在于上農下農。桑田十畝。樹桑二百五十株。或五百株。或千株。其法不齊。而多不如寡。得桑率自六十束至二百束。亦在精與不精。種藝中最益多利多者也。孟子說王道於魏。惠王其始曰。五畝之宅。牆下樹以桑。則五十者可衣帛矣。史記貨殖傳云。齊魯千畝桑麻。此其人富與千戶侯等。不溢辭也。故無財則力作。力作必樹桑。樹桑者。孟子所說魏侯亞聖賢侯論王道始以此事况大夫士乎。况庶民乎。而能勤之。不窺市井。而所欲自來。不求他方。而坐取給焉。無貪商姦富之醜。實有二處。

士之義。此則良民自足之資。而  
史之所稱述也。○束六而爲駄。

養蠶詩終

跋

今茲我が郷の先賢吉田芝溪先生歿後第二百二十三回忌に相當し、澁川町養蠶實行組合主催の下に追吊祭を舉行され、且つ先生の名著養蠶須知を上梓して廣く關係者に頒布し、先生の遺徳功業を顯揚さるゝことは、方今の世局に鑑みて誠に欣喜感激に堪へません。不肖職を郷費に奉じ聊か先生の事歴に就いて調査した緣由もあるので、需めらるゝまゝ、一言卷末を汚すことは無上の光榮とする所であります。

芝溪先生は我が澁川郷學の鼻祖とも謂ふべき偉人であります。學業を北牧の儒者山崎石燕、山城の儒者平澤旭山兩先生に享け、刻苦勉勵郷學を樹立して之れを本暮足翁先生に傳へ、高橋蘭齋先生を経て贈從五位堀口藍園先生に及び、その門下に政治産業教育軍事文藝各方面に多數の異材逸足を輩出し、大いに地方の民風を醇化したことは世間周知の事實であります。

芝溪先生の樹立された澁川郷學は、學問徳行家業藝術併進を旨とし、一派一流に偏せず穩健なる中道を進み、虚談空論を排して實踐躬行を尙ぶものであります。

先生の經世濟民に關する事蹟は數次の建白書に之れを見ることが出來ます。學識文藝の造詣、卓越せる才幹力量、優れた篤行は遺稿に依つてその片鱗を窺ふことが出來ます。先生は家弟翠屏先生と共に親戚及小作人を率ゐる芝中に移住を斷行して新田三十町歩を興し、業餘研學著書に努め篤學の後進子弟を薰陶されたのでありまして、男爵細川十洲翁は藍園詩鈔の序文中に

所謂先達之士不在今人則在古人也既而問之士人果得隱君子三人焉其一爲下仁田人高克明克明隱於商嘗養育寬齋令成其學其二爲澁川人田子成兄弟兄弟隱於農三人共以文學著聞一方歿後數十年鄉人稱道不衰  
芝溪、翠屏兩先生兄弟を讚稱し。

男爵揖取畊堂明府は、

前後於正之而起者又有高橋道齋市川寬齋吉田子正皆以德行奇節知名於一世  
と言はれて居ます。

芝溪先生の著書の重なるものは儒學の教義を明らかにした辨學遼東豕、我が國

躰の尊嚴を闡明した上毛上野古墓記、實業方面に於ては開荒須知救荒須知等でありまして養蠶須知亦實に其の一つであるのであります。

名著養蠶須知は當時養法の明星として輝き、當業者を指導して養蠶業の進歩發達に寄與貢獻したことは、一讀直ちに看取し得る處でありまして、其價値に就いては更めて贅言を加ふる必要を見ません。特に本書を通して芝溪先生の偉大なる人格を髣髴し得らるゝことは、實に我が郷不朽の至寶とするに足るものであること信じます。澁川町養蠶實行組合の這回の舉に深甚の敬意を表し芝溪先生の遺徳の一端を稱へて卷末の辭といたします。

昭和八年三月

澁川郷賢に於て

田部井鹿藏



昭和八年九月一日印刷  
昭和八年九月十日發行

(非賣品)

編輯人 群馬縣澁川町 澁川町養蠶實行組合長

印刷人 高崎市九藏町一〇三番地 吉田吉次郎

印刷所 高崎市九藏町一〇三番地 精眞社印刷所  
電話三四〇番

發行所 澁川町養蠶實行組合

群馬県立図書館



0499342-4

小野寺文庫